E709.2
Ko49
(14)(5)

正倉院御物圖錄

十四

始

E 708.709.2 Sh 96 K049 (14) (14)

正倉院御物圖録　第十四輯

南倉納物

目次

第一圖	子日手辛鋤　二口ノ一	〔全形〕
第二圖	同上	〔表・側・背〕
第三圖	同上	〔部分〕
第四圖	子日手辛鋤　二口ノ二	〔表・側・背〕
第五圖	粉地彩繪倚几	〔全形〕
第六圖	同上	〔部分〕
第七圖	間道纐纈絁机褥	〔全形〕
第八圖	同上	〔部分〕
第九圖	子日手辛鋤机褥帶	
	子日手辛鋤机覆帶	
第十圖	子日目利箒　二口ノ一	〔全形〕
第十一圖	子日目利箒　二口ノ二	〔全形・細部〕
第十二圖	子日目利箒倚几	〔全形〕
第十三圖	同上	〔部分〕
第十四圖	子日目利箒机覆帶	
	子日目利箒机覆	
第十五圖	椿杖　二枚	〔全形・細部〕
第十六圖	卯日御杖机	〔全形・細部〕

特別

第十七圖　針七隻
縹麻紙針裹
第十八圖　白色縷
第十九圖　黄色縷
赤色縷
第二十圖　黄萌黄合縷
雜色縷
綺緒
第二十一圖　銀張山水八角鏡（假一號）〔全形〕
第二十二圖　同上〔部分〕
第二十三圖　同上〔部分〕
第二十四圖　八角高麗錦鏡箱〔全形〕
第二十五圖　同上〔部分〕
第二十六圖　平螺鈿鳥獸花背圓鏡（假二號）〔全形〕
第二十七圖　同上〔部分・原色〕
第二十八圖　銀平脫花蝶鳥鏡箱〔全形〕
第二十九圖　同上〔部分〕
第三十圖　平螺鈿花背圓鏡（假三號）〔全形〕
第三十一圖　同上〔部分〕
第三十二圖　瑠璃鈿背十二角鏡（假四號）
漆皮八角鏡箱
第三十三圖　瑠璃鈿背十二角鏡〔原色〕
第三十四圖　十二支八卦背圓鏡（假五號）〔全形〕
第三十五圖　同上〔部分〕
赤漆八角鏡箱
第三十六圖　鳥獸花背圓鏡（假六號）
第三十七圖　漆皮圓形鏡箱
第三十八圖　海磯背圓鏡（假七號）〔全形〕
黑漆金銀繪鏡箱
第三十九圖　海磯背圓鏡〔部分〕
第四十圖　鳥獸葡萄背圓鏡（假八號）
漆皮圓形鏡箱
第四十一圖　鳥獸葡萄背圓鏡（假九號）
第四十二圖　鳥獸葡萄背圓鏡（假十號）
漆皮圓形鏡箱
第四十三圖　鳥獸葡萄背方鏡（假十一號）
漆皮方形鏡箱
第四十四圖　鳥獸葡萄背圓鏡（假十二號）
連弧四乳背圓鏡（假十三號）
第四十五圖　單圈漫背圓鏡（假十四―十六號）
第四十六圖　單圈漫背圓鏡（假十七―廿二號）
第四十七圖　漫背圓鏡（假廿三―廿四號）
第四十八圖　漫背圓鏡（假廿六―三十號）
第四十九圖　鳥獸花背八角鏡（假三十一號）〔全形〕
第五十圖　同上〔部分〕
第五十一圖　飛仙背八角鏡（假三十二號）

第五十二圖
第五十三圖
第五十四圖
第五十五圖
第五十六圖
第五十七圖
第五十八圖
第五十九圖
第六十圖
第六十一圖
第六十二圖
第六十三圖
第六十四圖

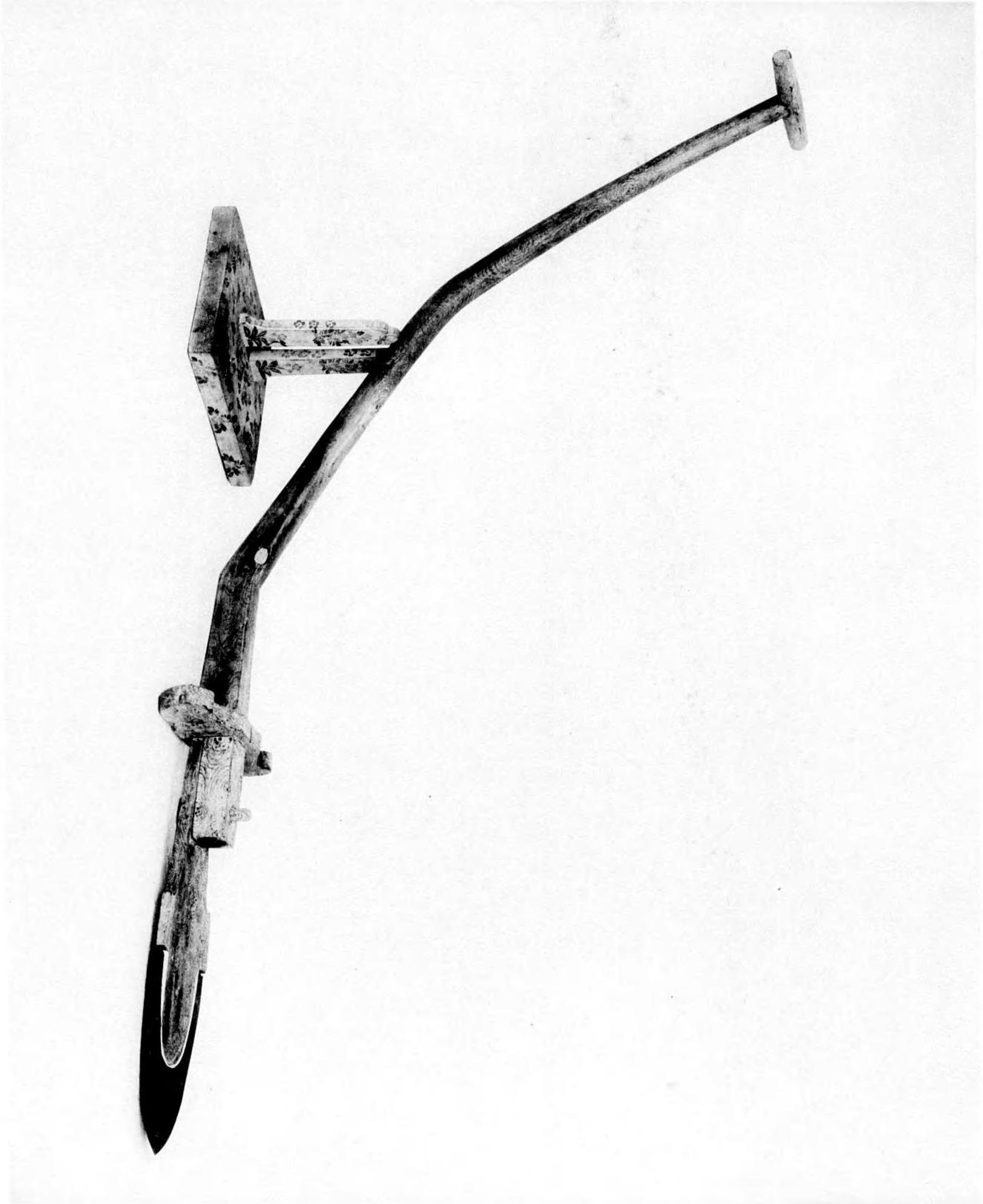
飛仙背八角鏡（假三十三號）
花鳥背八角鏡（假三十四號）
花背六角鏡（假三十五號）
花蟲背八角鏡（假三十六號）
漫背鐵鏡（假三十七號）
金銀繪漆鏡箱
黒漆金銀繪鏡箱
組緒殘缺
組緒殘缺
銀平脱八角鏡箱〔全形〕
同上〔部分〕
銀平脱圓形鏡箱〔全形〕
同上〔細部〕
同上〔部分〕
金銀繪漆皮八角鏡箱〔全形〕
同上〔細部〕
漆皮八角鏡箱
金銀繪圓形鏡箱〔全形〕
同上〔細部〕

第一圖　子日手辛鋤　二口ノ一（縮寫約四分ノ一）

弦長　一三一・〇糎　曲ナリ長　一五三・五糎

子日手辛鋤は後に掲げる子日目利箒と合せて、歳首「子の日」に於ける「帝王躬耕皇妃親蠶」の御儀に際し、東大寺に所獻のものと傳へ、現に二口を存す。柄は二段に屈曲し、鋤平と柄との接續には鐶を作り、其の形現在所用の鋤の何れとも異るは、甚だ興味ある事である。

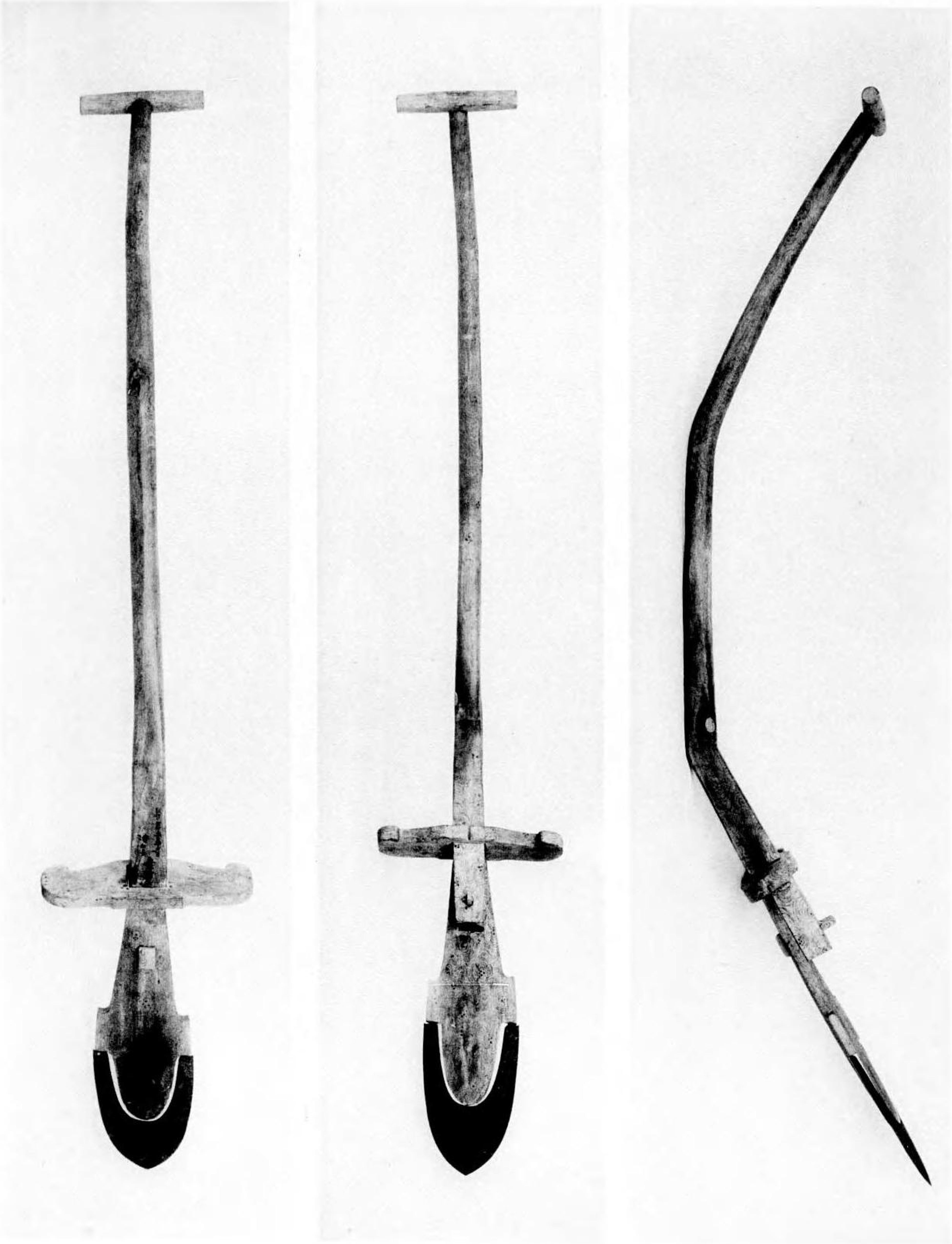
倚几を具す。圖はそれに倚せかけられたところを撮す。



第二圖　子日手辛鋤　二ロノ一　（縮寫約五分ノ一）

前掲子日手辛鋤の側面と表背とを示す。柄は樫材鋤平は檜材にて作り、共に素地に淡紅の具を塗り蘇芳にて木理を描く。木理の描線の自由輕妙なるもさる事ながら、共の渦心を花形に描くは意匠的に面白い試みである。柄の鐔元に近く「東大寺　子日獻　天平寶字二年正月」の墨書があり、以つて共れが天平寶字二年正月三日丙子使用の器たるを知る。

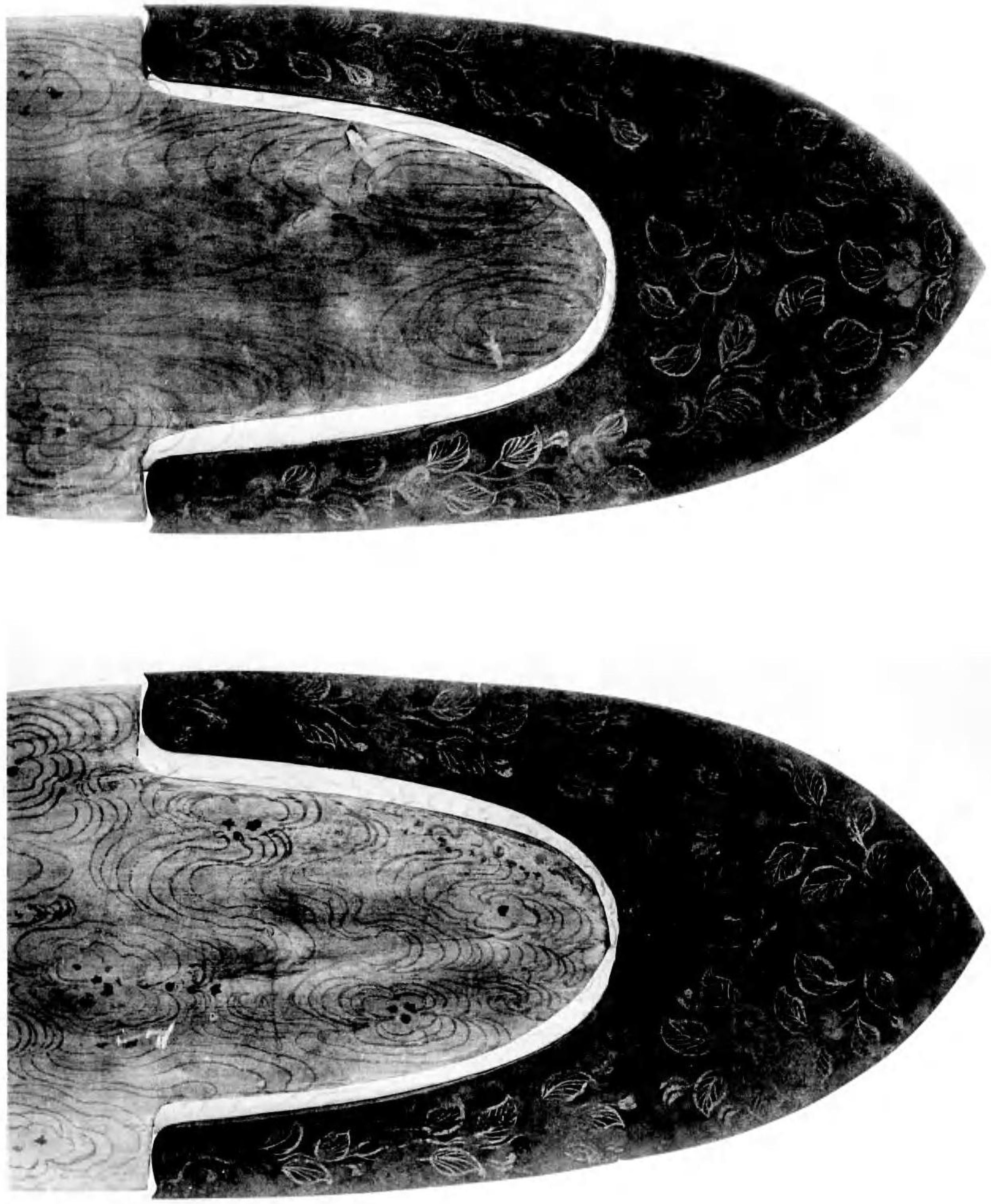
子日手辛鋤墨書銘（原寸大）



第三圖　子日手辛鋤（二口ノ一）部分

鋤先金物　長一八・五糎　幅一二・〇糎　（原寸大）

子日手辛鋤の鋤元部を原寸大に示す。鋤先は鐵製にて其の表裏に亘り、金銀泥にて臺草花蝶鳥の文様を描く。圖向つて右は表、左は裏を示す。尚鋤先とその鋤木との界にある、白きところは、木の痩せて鋤先を支へるに堪へざるにより、新材にて補修した部分である。



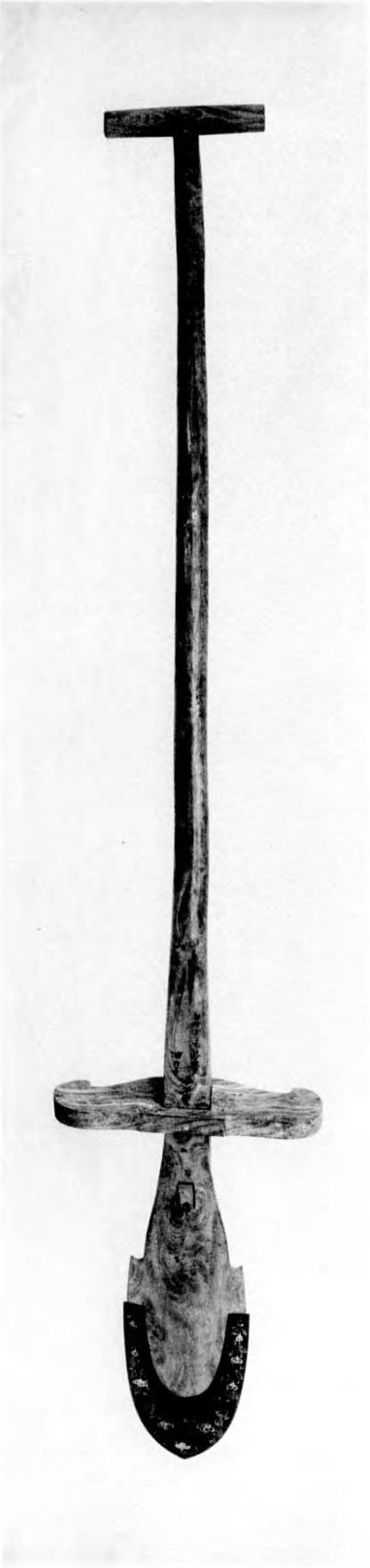
第四圖　子日手辛鋤　二ロノ二

（縮寫約五分ノ一）

弦長　一三〇・〇糎　　曲ナリ長　一四一・〇糎

寸法には多少の出入りもあるが、前者と先づ同形のものと云つてよい。但し、本品に於いて、鋤先の新補品であるのみならず、柄並鋤平の彩色も前者に比して蘇芳が勝ち、木理の表現にも暈を用ひて、其の趣を異にしてゐるのは注目に値する。

子日手辛鋤墨書銘（原寸大）

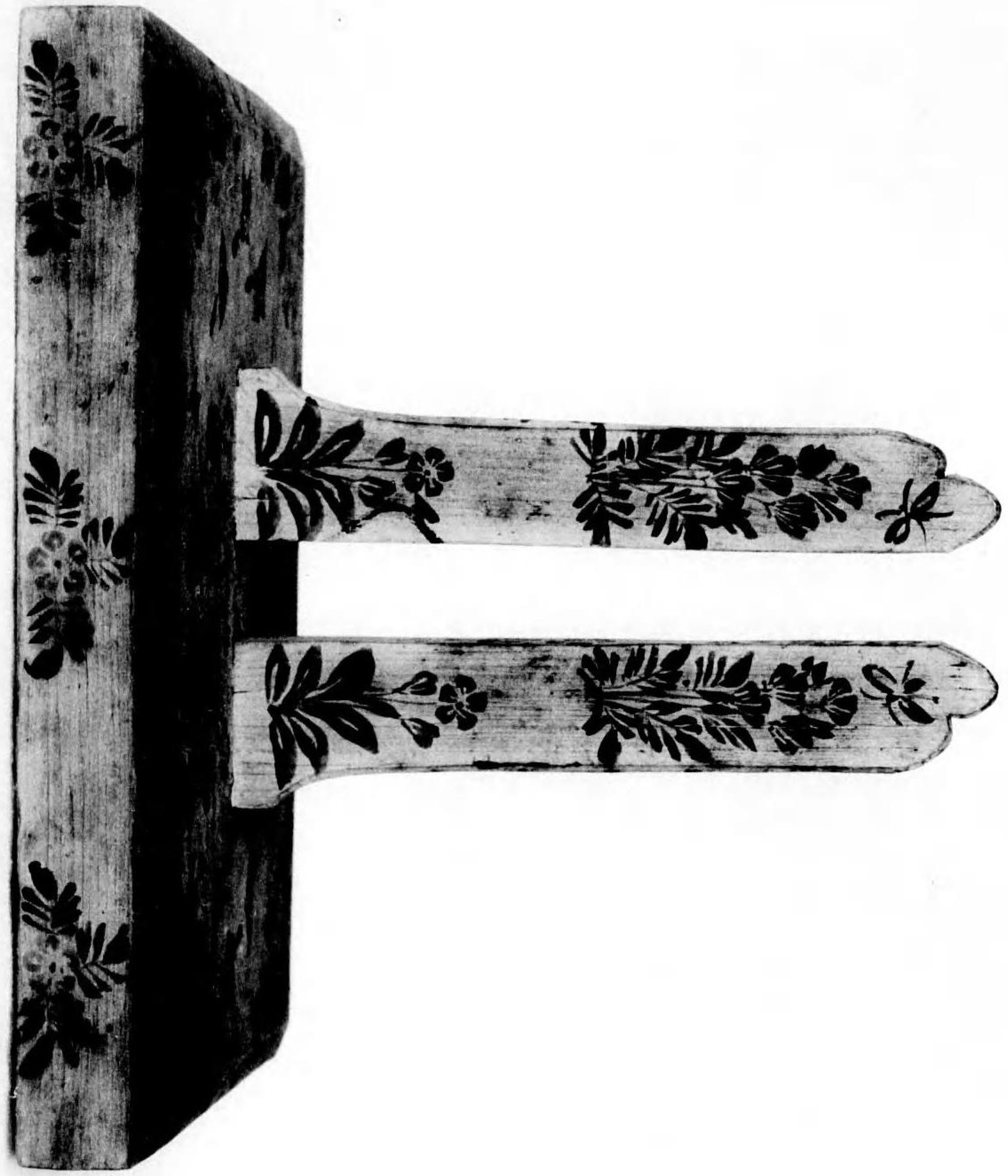


第五圖　粉地彩繪倚几　（原寸大）

高　二〇・〇糎

底板　竪二〇・二糎　横一三・六糎

子日手辛鋤附屬の倚几で、長方形の底板に二支柱を立てただけの極めて簡單な形をなす。然し支柱には刳形を作り底板には面を取り、且つ其の全面に胡粉を塗り朱緑二彩を以て花卉・花枝・鳥蝶の文様を描く。圖はその一面を出すも背面も亦同様の文様を作り、支柱側面には紅緑の小花文を散らす。



第六圖　粉地彩繪倚几部分 （原寸大）

前掲倚几の上面を撮す。長方形の底板の四縁の取面には小花文三個宛を紅と緑と色を交へて吹き寄せに散らし、其の內區には中央と四隅とに五叢の花枝文を配し、間隙に飛翔する蝶鳥を描く。圖案の構成は染織文樣の一科に似るが、其の花枝胡蝶文等のなす均正を、廻旋的の飛鳥によつて破らせてゐるのは、圖案にゆとりを見せて面白い。

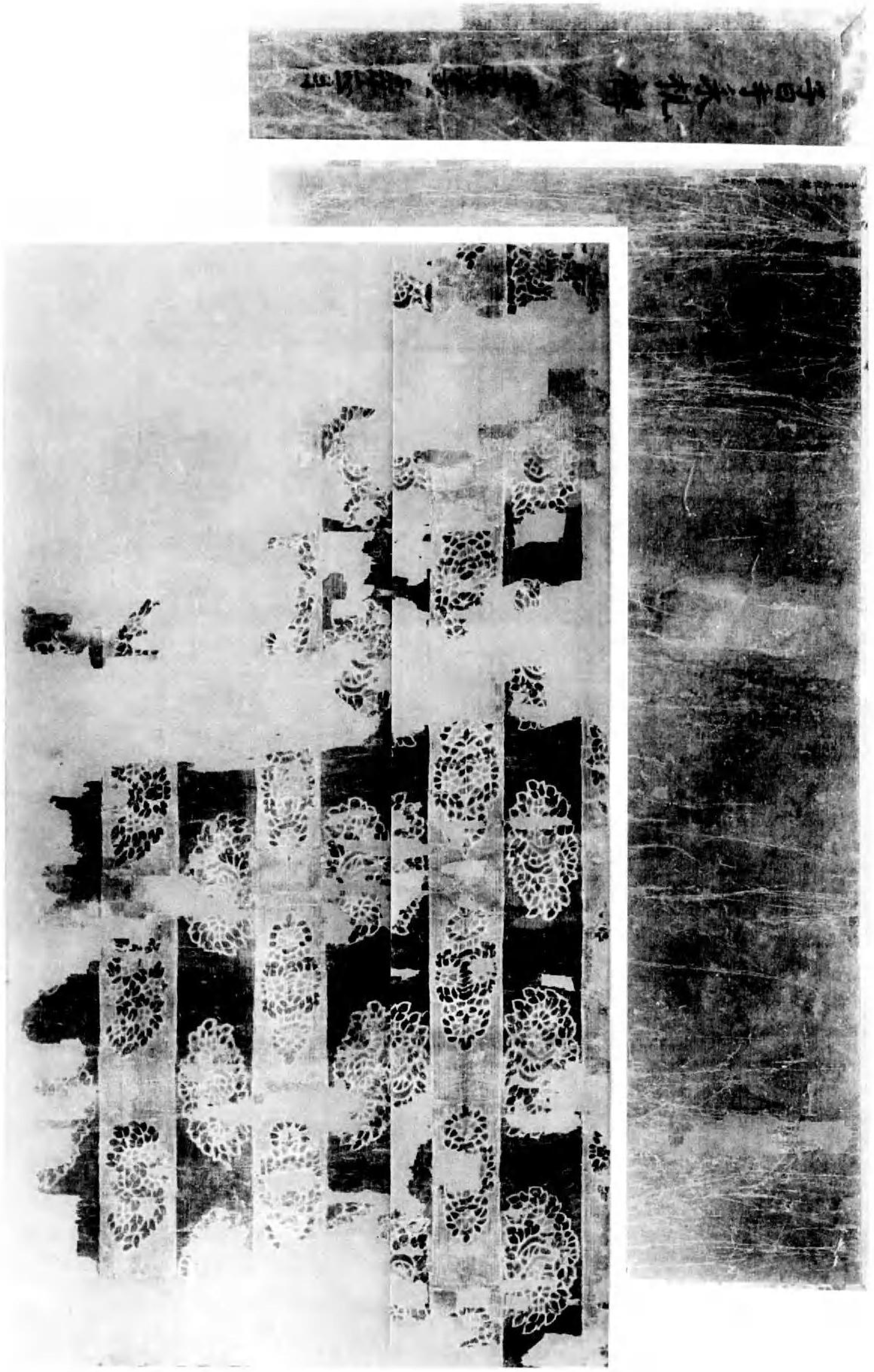
第七圖　間道纐纈絁机褥

（總寫四分ノ一　銘原寸大）

竪　五七・〇糎　　横　一〇六・〇糎

表は緋と茶との竪縞に集合花文を染め出した纐纈の絁、裏には無地の緑絁を用ふ。裏絁の一隅に墨書あり、「子日手未机褥　天平寶字二年正月」と讀まれる事により、其れが又との子日手辛鋤と一具のものであつた事を知る。机は逸して傳はらないが、本品の存在によつて、其の大きさもほゞ想像する事が出來る。

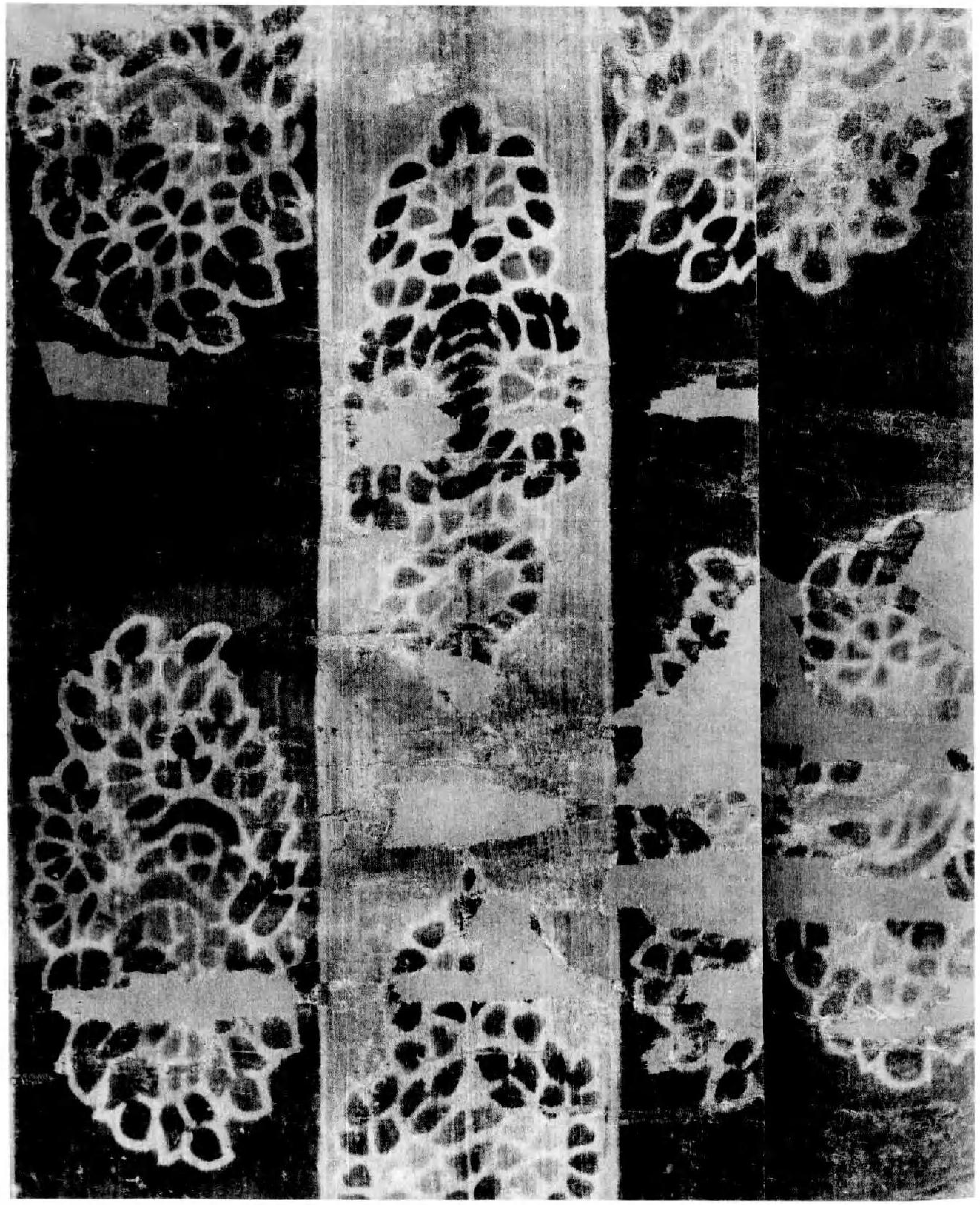
圖は褥の表裏を重ねて示したもので、其の左上は褥背銘記の部分を原寸大に撮つたものである。



第八圖　間道纐纈絁几褥部分

（原寸大）

正倉院御物中纐纈は多いけれども間道纐纈は甚だ少い。中央は茶地に花文を染出した縞、其の上下は縹地に花文を染めた縞を作るが、上下の縹縞に於いて花文の向きを異にしてゐる事は、些細な事ながら、製作者の用意の周到なるを思はしめる。



第九圖　子日手辛鋤机褥帶　（原寸大）

幅　三・三糎　現存長　六〇・〇糎

深綠絁にて作る。半幅（一四糎）の裂を四重に折りかさねて絎けたものらしいが、今は其の絎糸全部を失ふ。然し一端に「子日手耒机褥帶　天平寳字二年正月」の墨書ある事より前掲机褥と一具のものと知られる。褥を机の天板に結びつけて其の遊離を防ぐに用ひたものであらう。

子日手辛鋤机覆帶　（原寸大）

幅　九・五糎　全長　三六九・〇糎

淺綠地目結纐纈絁と、紺地目結纐纈絁とを縦に縫ひ合せて作つたもので、端を山形となし且つ「子日手辛鋤覆帶　天平寳字二年正月」と墨書す。（目利篩の墨書は手辛鋤に書き改めて消すことを忘れたものと思はれる）蓋し辛鋤を机上に置き之に覆を被せたものを更に結び飾る爲の帶と察せられる。

覆は淡碧の紗四幅にて作つたものであるが、朽損甚しくて今は廣げ難い。

子日目利箒
手辛鋤机覆帯
天平寶字二年正月

第十圖　子日目利箒　二ロノ一　（縮寫約三分ノ一）

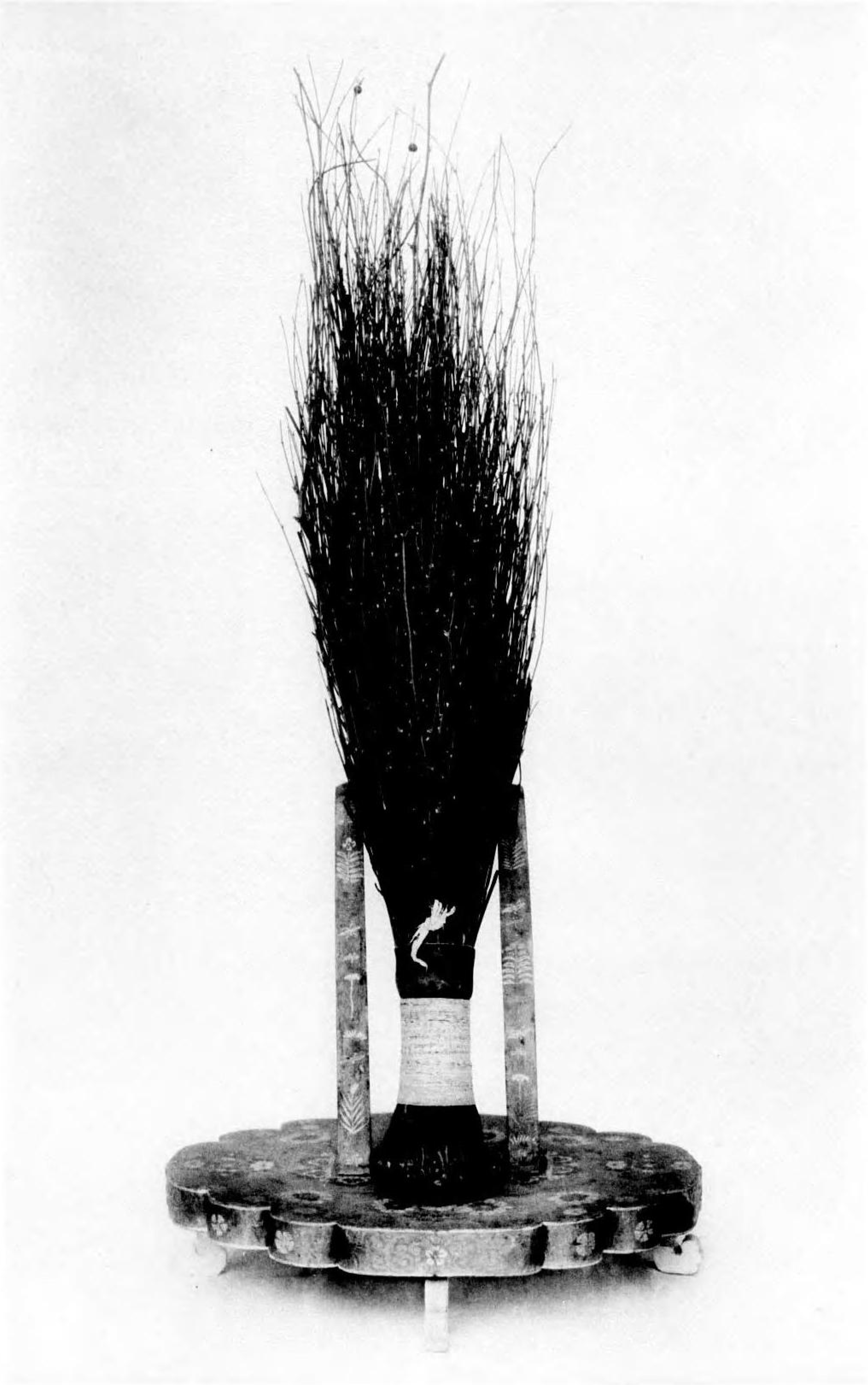
全長　六五・〇糎　把徑　三・九糎

手辛鋤と合せて歳首「子の日」の御儀に使用奉獻のものと傳ふ。所謂「めときはぎ」と稱する灌木の莖を束ね根元を紫革で包み金糸を纒いて把となし、梢末に瑠璃玉を貫いたもので、其の目利箒と稱するは、材料の「めときはぎ」に負ふところと云ふ。

「めときはぎ」は正稱「かうやばはき」と名づけ、菊科に屬する草本的小灌木で山野に自生し秋夏の交に於いて紅白色の小花を開くと云ふ。萬葉集卷廿の大伴家持の詠に「二年正月三日召二侍從竪子王臣等一令レ侍二於內裡之東垣下一即賜二玉箒一肆宴。于レ時內相藤原朝臣奉レ勅宣、諸王卿等隨レ堪任レ意作レ歌幷賦レ詩。仍應二詔旨一各陳二心緒一作レ歌賦レ詩。」と前書して

「始春乃波都弥乃家布能多麻婆波伎手爾等流可良弥由良久多麻能乎」

とあるは、これらの目利箒に就いて云つたものであらふか。



第十一圖　子日目利帚　二ロノ二

（全形縮寫約三分ノ一　部分原寸大）

全長　六五・〇糎　　把徑　三・七糎

材料製作等前者と大体同じであるが、彼の把を金糸で纒くに對しこれは玉纒きに作る。玉纒の玉は大方脱落散佚して僅かに一小部分を留めるに過ぎないが、革上に印した玉痕と現存の殘片とに徴して、之れは吹玉を黄・淡黄・深緑・褐色・黄・淡緑・深緑の暈繝に貫いた緒で把上十五段卷にしたものであつた事が知られる。

圖右は其の全形、左は把の部分を原寸大に撮す。

第十二圖　子日目利箒倚几

（縮寫約九分ノ七）

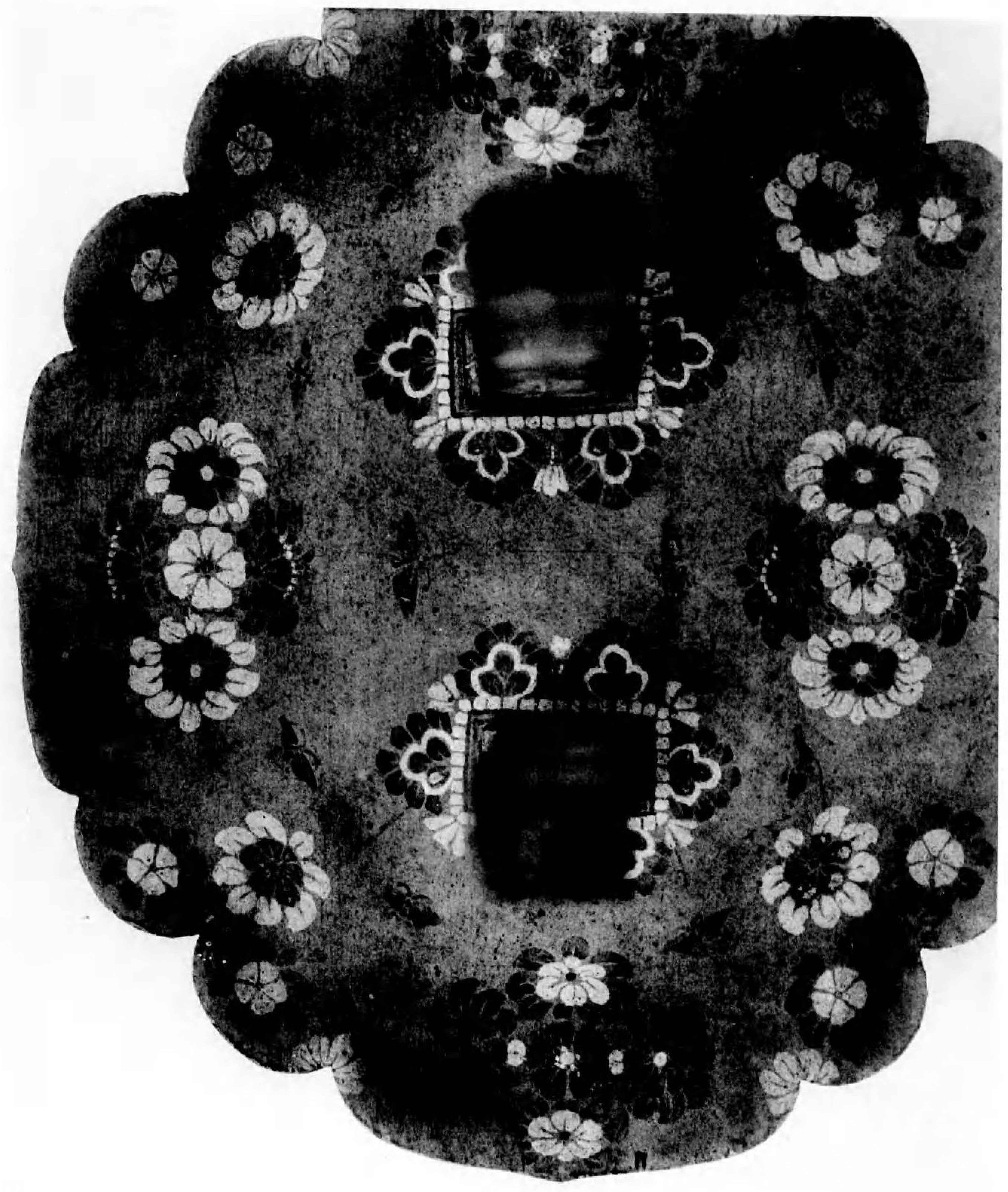
高　二九・五糎

底板　長徑　三一・〇糎　短徑　二六・二糎

子日手辛鋤に附屬の倚几があつたと同樣、目利箒にも亦倚几を具す。倚几は四稜長花形の底板に二柱を立て四足を附した形のもので、其の支柱には蘇芳の具を塗り胡粉と金泥で花卉・蝶・蜻蛉等の圖文を描き、底板には淡緑地に胡粉・蘇芳緑彩等にて花枝蝶鳥の文様を作り、脚は花足に刳つて只胡粉をのみ塗る。

第十三圖　子日目利箒倚几部分（原寸大）

倚几底板の上面を示す。支柱の基部には唐花の座を圖し、これを中にして、四方に四窠の集花文を描き、隅に花枝文を配し、間際に飛蝶鳥を散らす。手辛鋤の倚几に比べて器形色調圖案等を殊更に變へてゐるのは注目すべきである。



第十四圖　子日目利箒机覆帶　（原寸大）

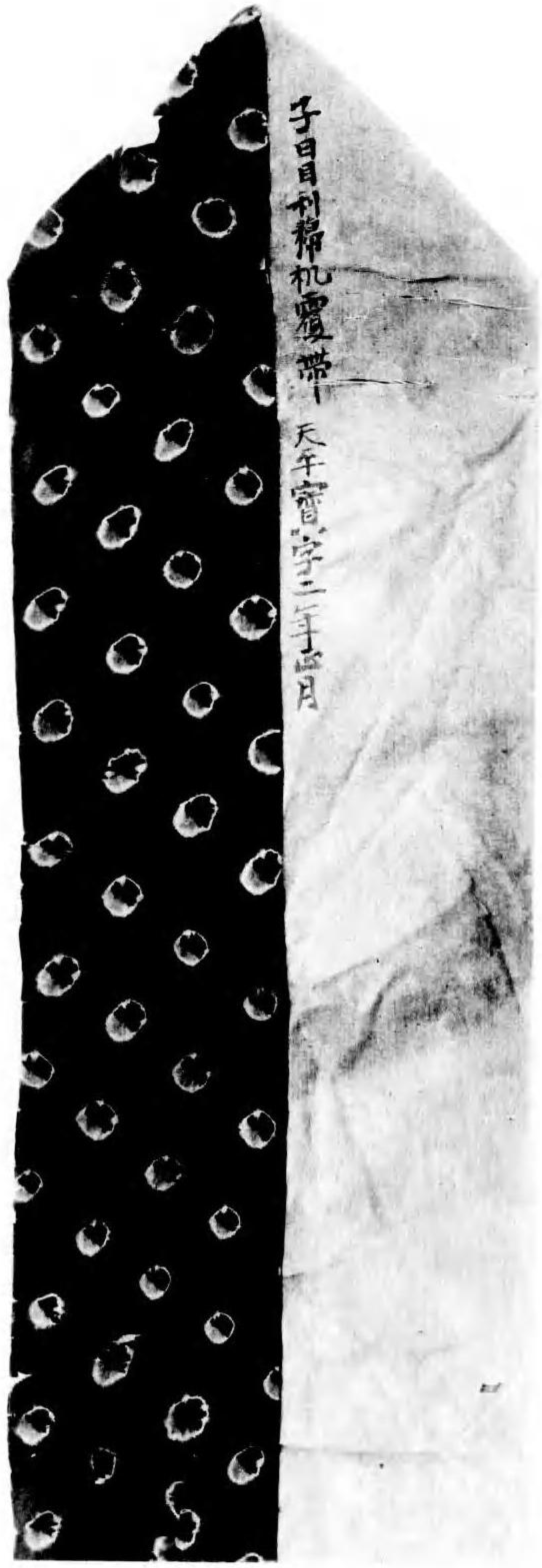
幅　九・五糎　全長　三七二・〇糎

淺綠地幷に紺地の目結纐纈絁を縱に縫ひ合せて作つたもので、其形其長共に前揭子日手辛鋤机覆帶とほゞ同樣である。一端に墨書して「子日目利箒机覆帶　天平寶字二年正月」とあり目利箒附屬のものと知られる。

子日目利箒机覆　（原寸大）

横　一六〇・〇糎　竪　二二〇・〇糎

淡碧地の生絹の紗四幅を縫合せて作つたもので、其の一隅に「子日目利箒机覆　天平寶字二年正月」の墨書があり、以て其れが目利箒の机覆なる事を知る。裂の質幷染色等手辛鋤の机覆に全く一致する。


子日目利箒机覆帶
天平寶字二年正月

第十五圖　椿　杖　二　枚　（全形約六分ノ一　部分原寸大）

〔甲〕　長　一五九・〇糎　頭徑　一・八糎
〔乙〕　長　一五九・〇糎　頭徑　一・九糎

何れも椿の皮付きの幹を以つて作り、其の皮斑に從ひ金又は銀泥にて界を描き且つ黃・綠・褐の三彩を斑に塗つたもので、杖頭并石突は三角錐形に截り綠靑を塗り金界線を描く。其の形態優美にして彩色華麗なるは常の實用具とは思はれず、寧ろ儀杖用の具とすべく、而して其れが二枚一具をなし、且各長五尺三寸三分有る事等から考へても、正月初卯日の行事に用ふる卯杖となすが適當ではあるまいか。

正月初卯日に卯杖を作り、精魅を逐ひ惡鬼を拂ふ事は、支那漢代よりの風習で、我國でも書紀持統天皇三年正月條に「乙卯大學寮獻ニ杖八十枚ー」とあり、夙に其の事の行はれたるを知れば、御物中にこれあるも異とするに足らぬ。尙卯杖に關しては延喜式卷第四十七にも「……桃木三束、梅木二束、椿木二束並長五尺三寸」とあり、其の制の本杖に近き事は甚だ興味深い。

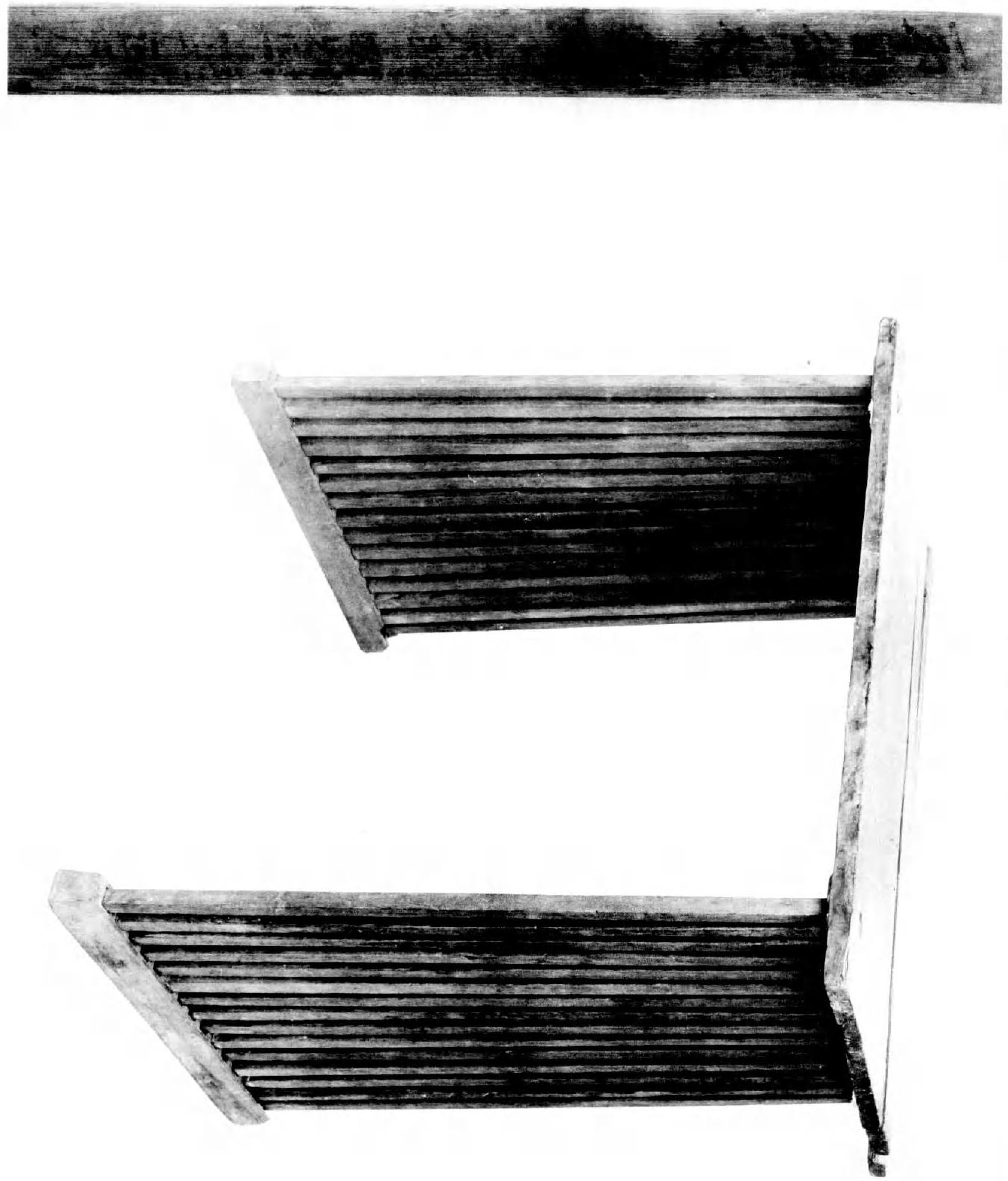
圖右は其の全形、左は部分を原寸大に示す。

第十六圖　卯日御杖机（縮寫約五分ノ一）

高　八九・八糎
天板横九七・七糎　幅五三・〇糎

所謂三十足机と稱するもので、杉材を以つて作る。製作は普通であるが、其の足の一本に「卯日御杖机　天平寶字二年正月」の墨書があり、それが卯杖附屬のものであつた事を知る。机には褥を敷き又子日手辛鋤玉箒と同様褥帶・覆・覆帶等も具備したであらふが、其れらは今見る事は出來ない。

右圖は机の全形を示し、左圖は脚の墨書を原寸大に出す。



第十七圖　針　七　隻　（縮寫四分ノ三）

大針三隻　各長　三四・九糎
小針四隻　各長　一九・五糎

七月七日の乞巧奠に、瓜果七品針七品綵縷七條を供へて織女を祭り手藝の巧を祈るは支那の古俗であるが、それは又我國にも傳へられて奈良時代既に此の風習の存した事は萬葉集にも見られるところである。御物中偶々非實用的と思はれる銀銅鐵針七隻を存するは、次の綵縷七條と合せて、當時に於ける乞巧奠の納物と察すべきであらう。大針三隻小針四隻を算へ、其の大針三隻は銀針銅針鐵針の三種で、小針四隻は銀針鐵針各二本とよりなる。小針は後世の普通の針の如く、本に小孔を穿ち他を圓錐にしてゐるが、大針は本を斷面隋圓となし、中程は圓、先は平に作り、且つ小孔を本より稍下つて穿つ。尚大針には紙箋を附し、針の法量と附屬彩縷の長さとを次の如く記してゐる。

一〔表〕銀針一隻　長一尺一寸六分　重三兩三分小　〔裏〕糸長一千一百卅四尺
二〔表〕銅針一隻　長一尺一寸六分　重三兩小　〔裏〕糸長一千一百卅五尺
三〔表〕鐵針一隻　長一尺一寸六分　重二兩三分小　〔裏〕糸長一千一百卅六尺

緑麻紙針裹　（縮寫四分ノ三）

竪　二四・五糎　幅　四・一糎

八寸四方の緑麻紙を二つ折りにしたものを更に三つ折りにして、其の表面に「緑淡樣糸一條 重二兩二分大 鐵針一隻」と墨書したもので、鐵小針と糸とを入れたものと思はれる。

緑淡搓糸一絛 重二両二分大
鐵針一隻
鐵針一隻
銅針一隻
銀針一隻

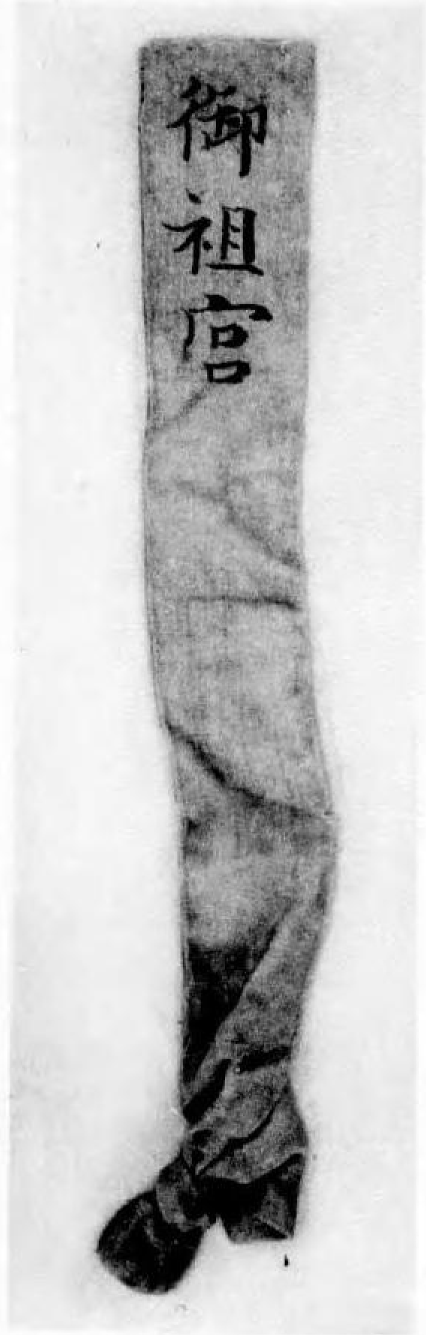
第十八圖　白色縷

（縮寫四分ノ三）

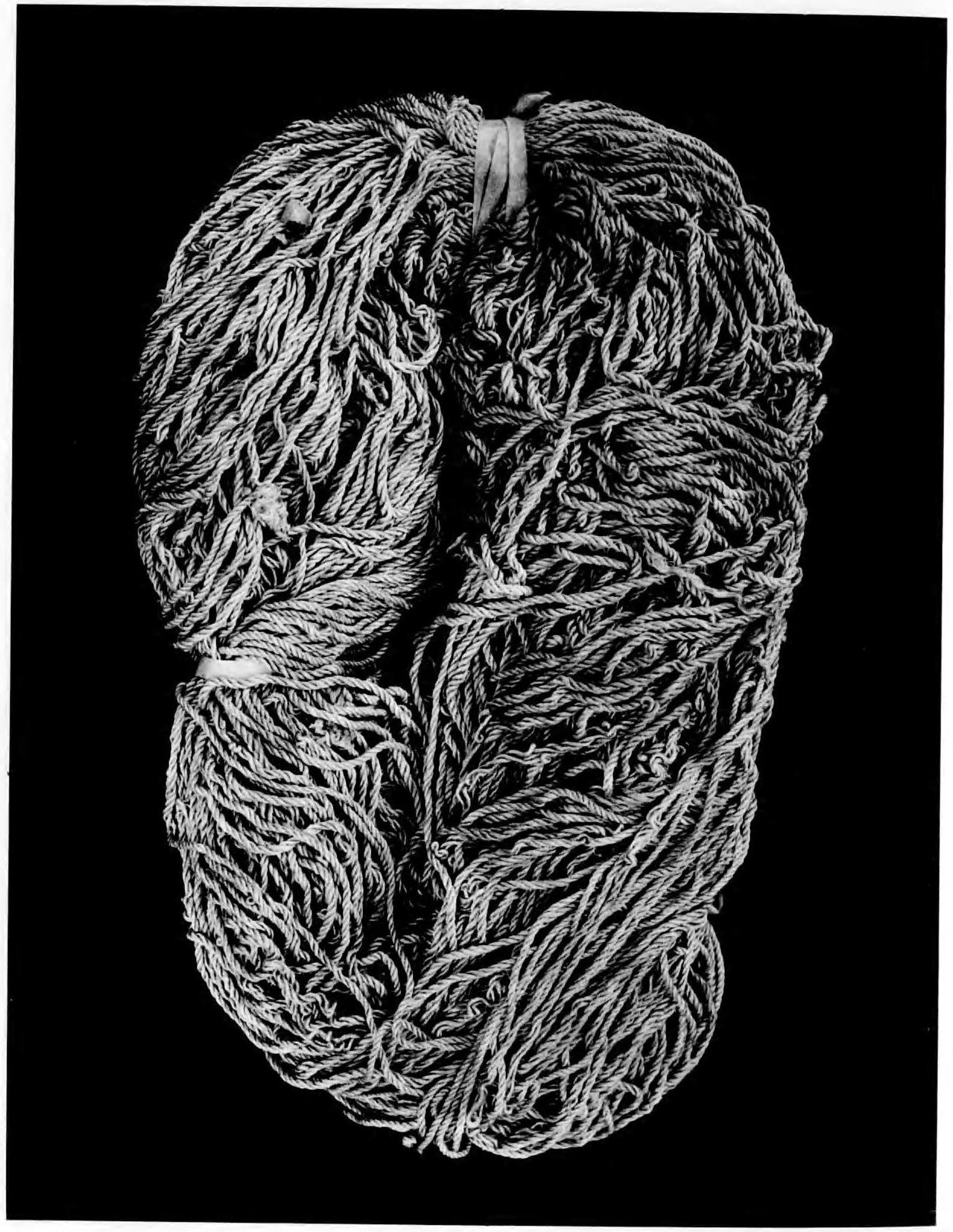
重　六二五瓦

白縷二條・赤縷一條・黃縷一條・黃萠黃合縷一條・雜色縷二條、合七條の一つで、白練糸三子を合せて左繩にした糸を、周廻約一二五・糎許の枷(かせ)にしてゐるが、今縺れて其の緒を失ふ。尙附屬の白絁箋には「御祖宮」の墨書、附屬紙片には琴・箏・收了・琵・銀等の文字を記するも、それが何を意味するかは詳で無い。

同樣の白色縷（重二六〇瓦）を今一條存するが、其れは白練糸二子を左繩に合せたものである。



白絁箋（原寸大）



第十九圖　黄色縷　（縮寫約四分ノ三）

重　三〇〇瓦

黄の練絹糸三子を集め左縄に合せた縷で、今は球狀に卷き更に同色の縒糸にて縱横十文字に絡げてゐる。

赤色縷　（縮寫約四分ノ三）

緋色の練糸三子をまた左縒りに合せたものであるが、その卷き方は前者程入念で無い。

第二十圖　黄萠黄合縷〔上〕（縮寫約四分ノ三）

重　一一〇瓦

黄練糸三子を左縄にした縷と、萠黄糸三子を左縄にした縷とを合せ巻いたものである。

雜色縷〔中〕（縮寫約四分ノ三）

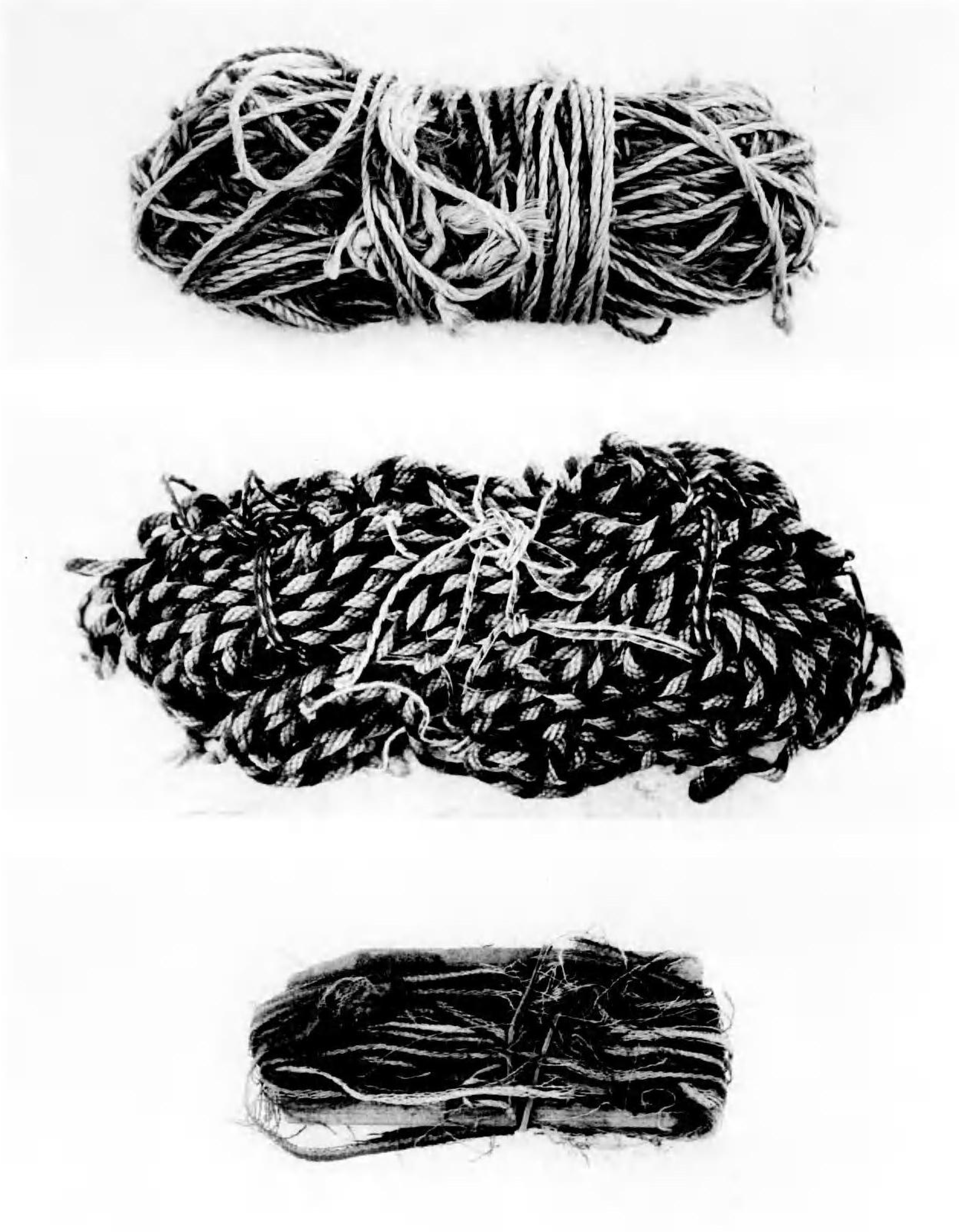
重　二五〇瓦

黒色糸の二子縒りと、淺黄に刈安の二子縒りと、碧に黄の二子縒りとの三條の糸を合せて右縄にしたもので、之を手絡らにして雜色緒で結んでゐる。同樣の雜色縷今一條（重二三〇瓦）を存するが玆には略す。

綺緒〔下〕（原寸大）

幅　〇・七糎

紫・綠・黄・綠・紫・綠・黄・綠・紫の順序に彩糸を配列した暈繝縞の綺で、現に縱一〇糎横四・三糎の木製糸纏に巻き、それを藁で括つた原形の儘で殘つてゐる。



第二十一圖　銀張山水八角鏡〔假一號〕（縮寫約九分ノ五）

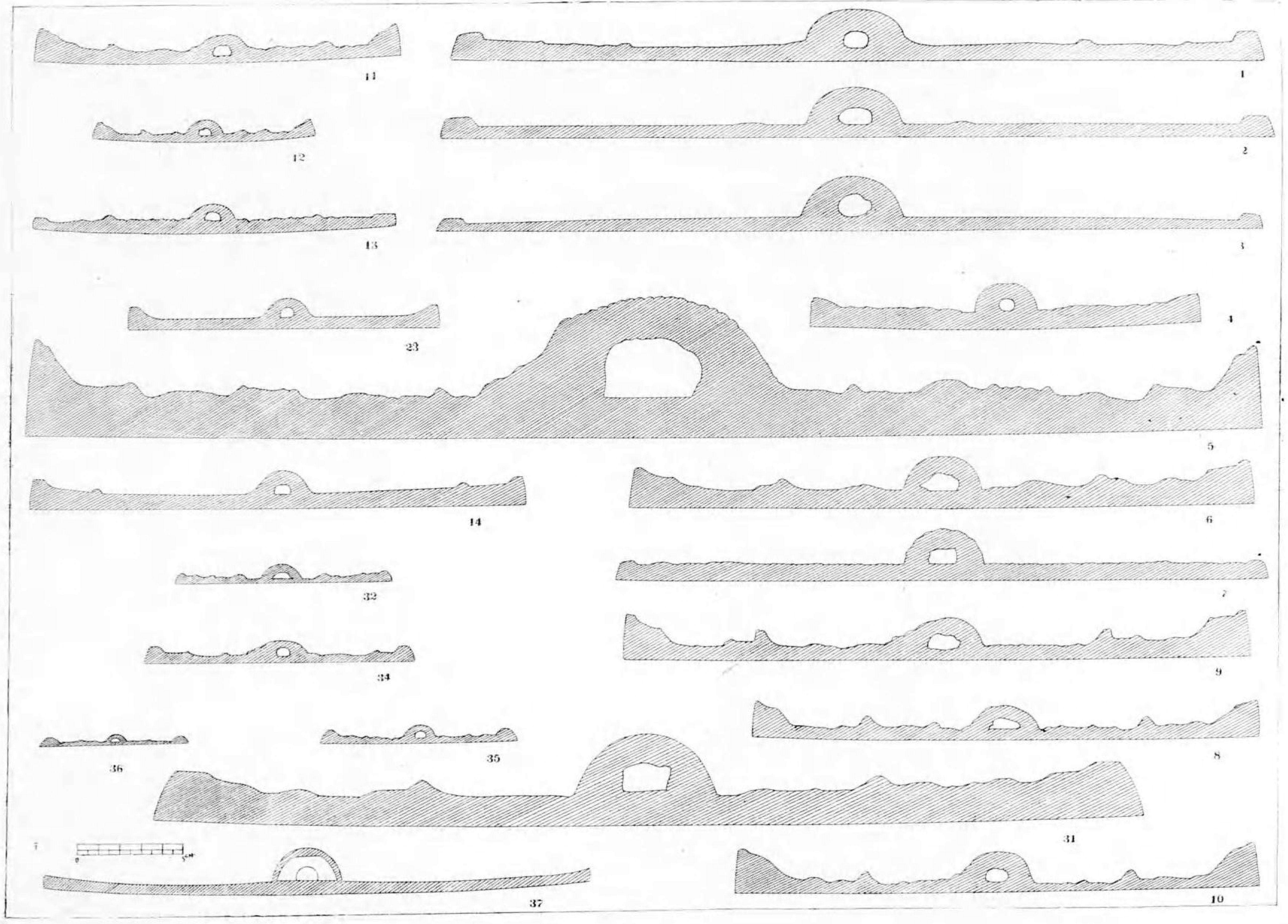
長徑　四〇・七糎　短徑　三八・五糎　厚　一・二糎
鈕高　一・九糎　重　七・六五瓩

白銅製八稜鏡の鏡背に銀板を張り、之に細文を鏤刻したもので、此手のものは支那發掘品中には稀に見るが、傳世のものとしては、恐らく世界唯一のものであらう。

鏡背は界線によつて三區に分たれ、其の內區には海中の四岳を圖し之に盤龍・鴛鴦・龜鼈・鳳鶴・麋鹿・弁彈琴吹笙の二仙を配し、中區には孔雀・鳳凰・鴛鴦と廻旋する寶相花唐草とを描き、外區には八卦に花卉鳥雲を散らして其の間隙に

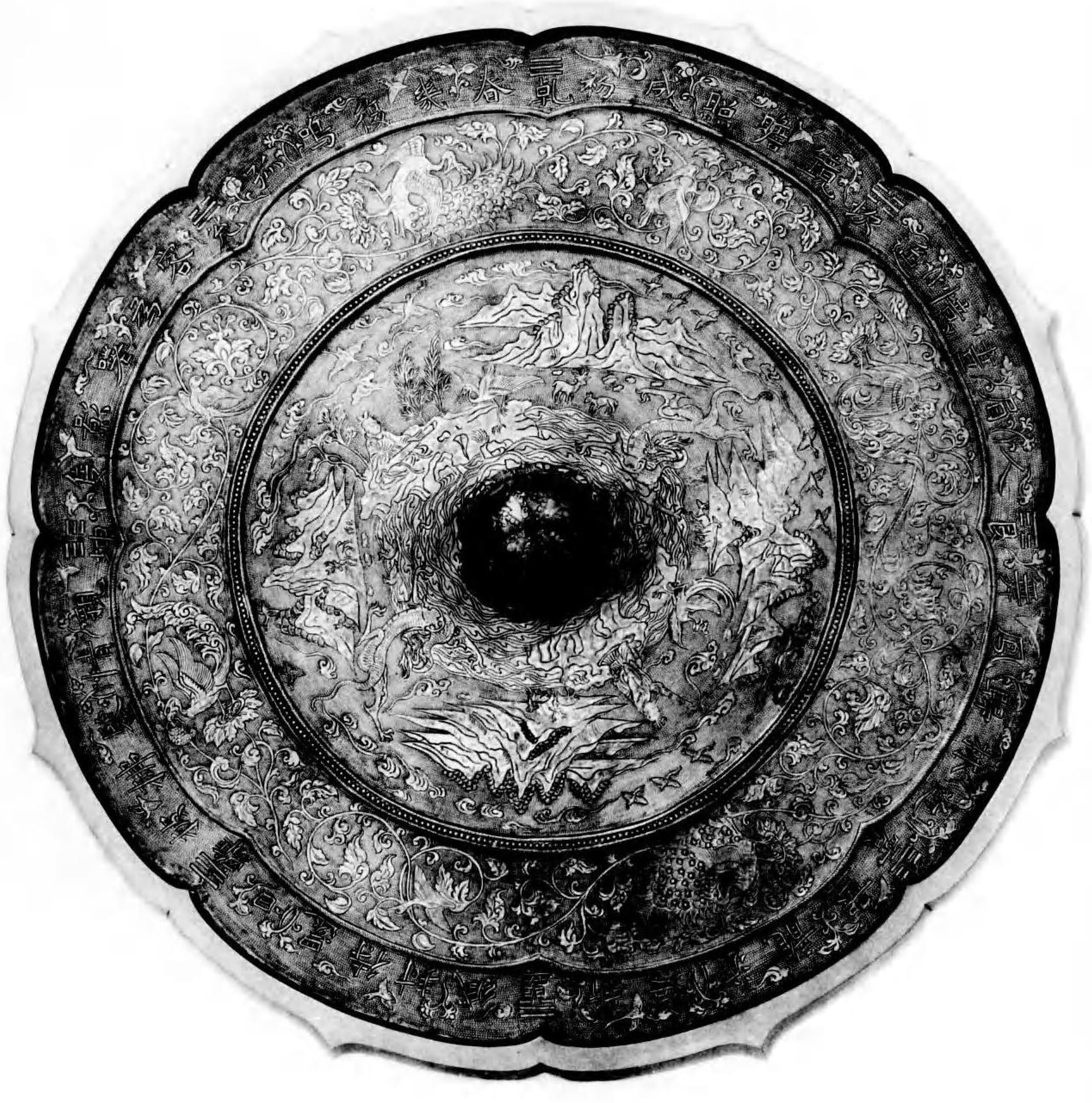
「隻影嗟レ爲レ客　孤鳴復幾春　初成二照瞻鏡一　遙憶二晝眉人一
舞鳳歸レ林近　盤龍渡レ海新　緘封待二還日一　披拂鑒二情親一」

の五言律詩四十字を配す。



鏡鑑實測圖

［1］銀張山水八角鏡
［2］平螺鈿鳥獸花背圓鏡
［3］平螺鈿花背圓鏡
［4］瑠璃鈿背十二角鏡
［5］十二支八卦背圓鏡
［6］鳥獸花背圓鏡
［7］海磯背圓鏡
［8］鳥獸葡萄背圓鏡
［9］鳥獸葡萄背圓鏡
［10］鳥獸葡萄背圓鏡
［11］鳥獸葡萄背方鏡
［12］鳥獸葡萄背圓鏡
［13］連弧四乳背圓鏡
［14］單圏漫背圓鏡
［23］漫背圓鏡
［31］鳥獸花背八角鏡
［32］飛仙背八角鏡
［34］花鳥背八角鏡
［35］花背六角鏡
［36］花蟲背八角鏡
［37］漫背鐵鏡



第二十二圖　銀張山水八角鏡部分　（原寸大）

前掲鏡背の中區を原寸大に示す。水波の表現が法隆寺橘夫人念持佛の寶池の水に似てゐるのも注目すべく、山岳の描寫が狩獵文銀壺のそれに共通なるも興味深い。又鏡鈕を海中の孤島に擬して山皺を刻み周邊の磯に龜鼈を覗かせてゐるのは意匠的に奇抜である。

尙本鏡背の文樣の部分には全部鍍金を施し、以外の部分は銀地の儘にて魚子を打つが、かゝる部分的の鍍金技術は今の專門家も尙難しとするところと云ふ。

第二十三圖　銀張山水八角鏡部分　（原寸大）

銀張鏡々背周縁の各部を示す。鏤鐫の銘文に於いて、それに運筆の順序が考慮されてゐる事は、甚だ興味ある事で、後世の筆順を重ずる石刻文字の起源の古きを思はせる。

因に、殆んど同時代と思はれる法隆寺獻納御物銅釣桝の双鈎文字にはまだ筆順を考慮してゐない。

第二十四圖　八角高麗錦鏡箱

（縮寫約二分ノ一）

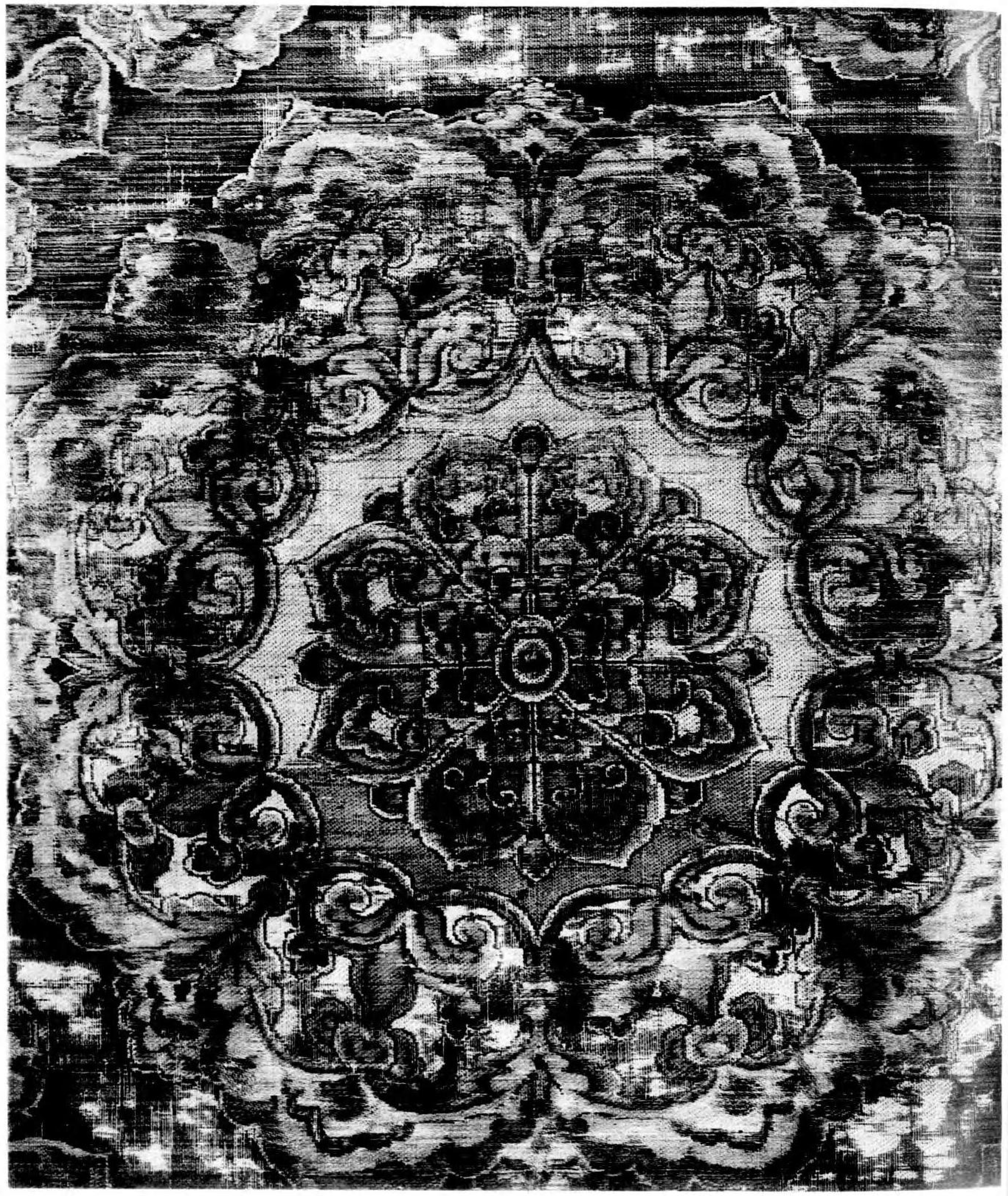
蓋　長徑四五・〇糎　短徑四二・二糎　高三・五糎

身　長徑四二・二糎　短徑三九・九糎　高二・八糎

銀張山水八角鏡に附屬の箱で、檜の一枚板を八稜形に截り蓋身共内刳りして箱木地を作り、之に白地唐花文錦を貼つたものである。大唐花文を八稜形の中央に配し、宛も此の箱の爲に此の錦を織り成した如く、其の應用の妙は賞して餘りある。尚箱底には木瓜形を透して鏡の出し入れに便にし、內面白生絹を張り且つ赤地花文繭紬の襯を作るも、襯は朽損して其の殘片を留むるに過ぎ無い。

第二十五圖　八角高麗錦鏡箱部分　（原寸大）

蓋表の白地錦を原寸大に撮す。黄・赤・緑・紫・縹の彩糸を以つて、中央に八瓣の裝飾蓮華をあらはし、これを繞つて忍冬唐草を圖案して複合の大花文を形成せしめたもので、琵琶袋の大花文錦に次ぐ華麗な花文錦と云へる。圖中花文の周圍の斑點は地糸のひけて裏糸の現れた爲に出來たもので、其の白斑のところこそ地文の古き部分である。



第二十六圖　平螺鈿鳥獸花背圓鏡〔假二號〕　（縮寫約五分ノ三）

徑　三九・五糎　緣厚　一・一糎　鈕高　一・七糎

重　五五五瓩

鏡面の僅かに凹反した白銅製の鏡であるが、其の鏡背には螺鈿琥珀を嵌して文樣をあらはし、今に光彩陸離として目も醒める程である。

鏡背は猪目形を併列した界圈によつて內外二區に分ち、其の內區には鈕を遶つて捩文を現はしそれより花文を放射狀に配し、外區には四方四區の隨圓を劃し蔓草花を圖案し、之に一双の獅子、一双の犀、四双の鳥、二双の雲文とを左右對照に布置したもので、複雜の中に統制あり、統制の中に變化を見る。獅子双鳥の文樣は他にも許多使用せられるところであるが、犀の圖樣は御物中他に類例を見ない。

第二十七圖　平螺鈿鳥獸花背圓鏡部分　（原寸大　原色）

鳥獸花文の淡黃なるは螺鈿、花心の赤きは朱彩に琥珀を被せたもので、その琥珀の下には、朱彩の中金泥にて花文を描くを普通とする。今は琥珀大方風化して花文まで透けるものは少いが、圖中鏡緣に並ぶ五瓣花文の心、外區上方の中央花心、內區對角の四花心等には、尙僅か乍ら其れを認める事が出來る。又文樣の地文をなす青綠の霰は孔雀石の細片を沈めたもので、其の配色上の苦心も偲ばれる。

第二十八圖　銀平脫花蝶鳥鏡箱

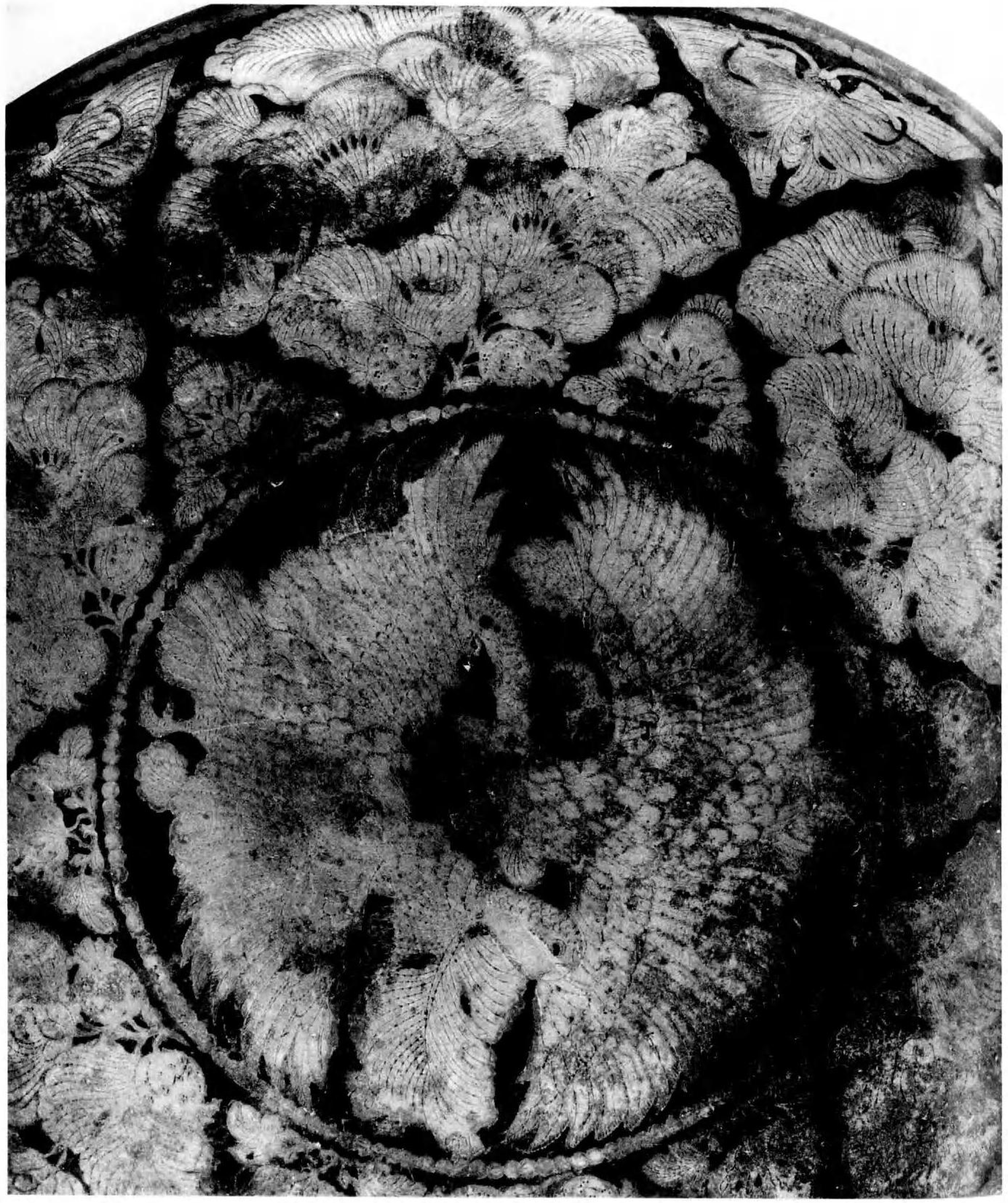
（縮寫約二分ノ一）

徑　四一・五粍　全高　七・〇粍

前揭の平螺鈿鳥獸花背圓鏡に附屬の箱で、蓋は印籠に被せ、底には香台を作る。木製挽物の木地に布を下張りし、黑漆を塗り、其の蓋表と側面とに銀平脫にて大文樣をあらはした堂々たる鏡箱である。今は銀が黑く錆びてあまり人目を引かないが、白光に輝いた製作當初の姿は、實に鮮か其のものであつたと思はれる。

第二十九圖　銀平脫花蝶鳥鏡箱部分　（原寸大）

蓋表の一部を示す。其の文様の雄大なるは、正に時代の氣宇を反映せるものと云ふべきか。中央連珠の圈圓中双鳥翼を張つて廻旋し、外區の花枝文は、欝蒼として莖を交ふ。而して其の線刻の流麗にして凝滞無きは技術的にも優れた工人の手になれる事を思はせる。平脫の線刻に鏨の痕を見せ所謂「蹴り彫」にしてゐるのは珍らしい。



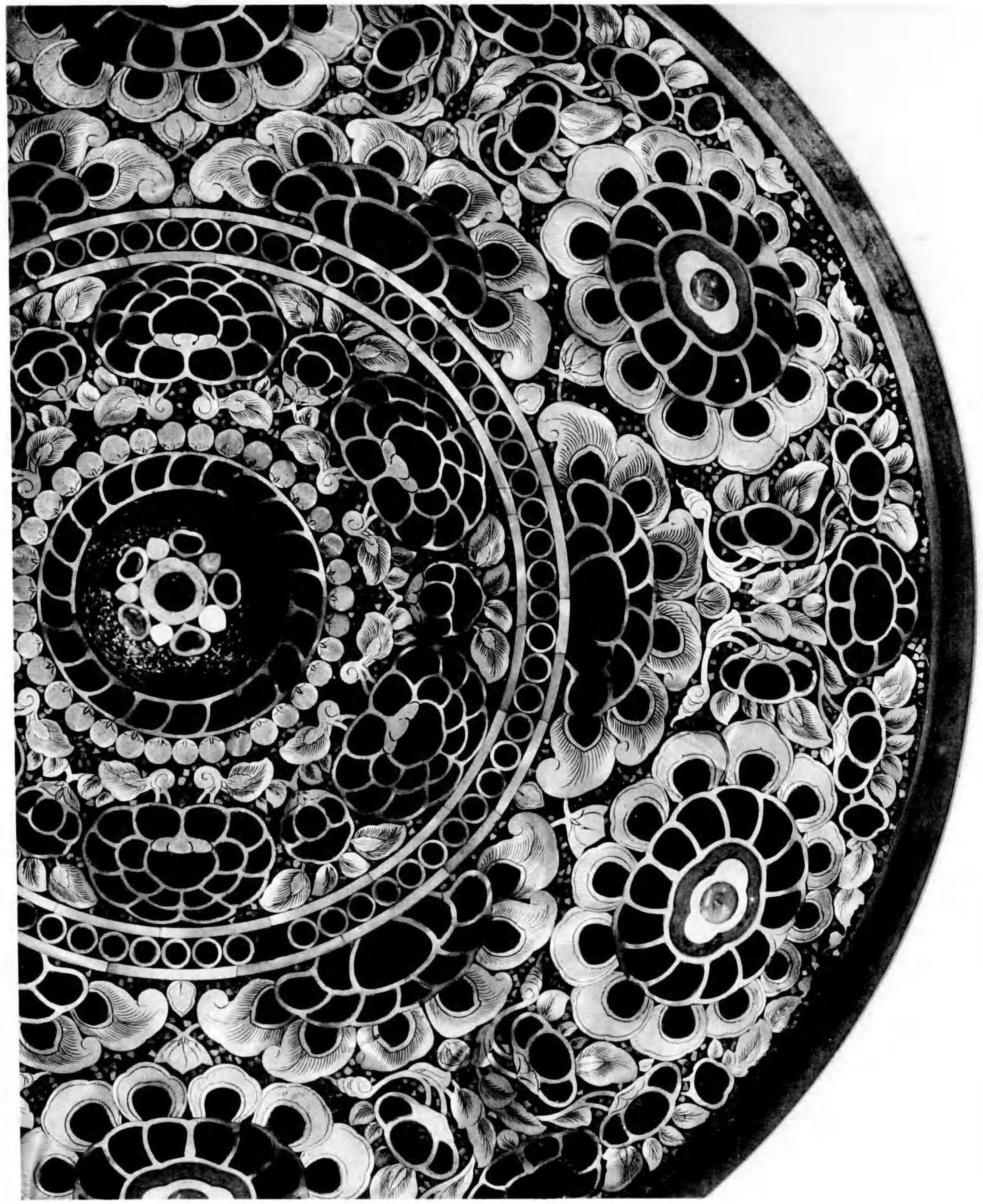
第三十圖　平螺鈿花背圓鏡〔假三號〕　（縮寫約五分ノ三）

徑　三九・三糎　緣高　〇・九糎　鈕高　二・〇糎
重　五・四八瓩

鏡は白銅製にして面に反り無く、背には螺鈿を埋めて華麗なる花文をあらはす。螺鈿の技法は、前揭鳥獸花背螺鈿鏡と全く同じであるが、其の圖樣に於いて彼の左右對照的なると異り、これは放射對角的に作る。即ち中央圓鈕を遶つて捩蘂の座をあらはし、これと同心の連珠圈圓を描いて鏡背を內外二區に分ち、其の內區には六花六萼を放射狀に配し、外區には六花枝に六花を圖して所謂唐花文樣の構想にならふ。

第三十一圖　平螺鈿花背圓鏡部分　（原寸大）

鈕の捩蓮座並に界圈の曲線は青螺の細片を合せて文樣を作つてゐるけれども、花文は努めて一枚の螺より透し彫りにしたものが多い。而してこれらの花心には、又朱彩金泥を沈め琥珀を嵌するものが多いが、特に外區中央の大花の心に限り琥珀に代へて玳瑁を被せ、光彩に變化あらしめてゐるのは注目するに足る。



第三十二圖　瑠璃鈿背十二角鏡〔假四號〕（原寸大）

長徑　一八・五糎　短徑　一七・三糎　緣厚　一・四糎
鈕高　一・二糎　重　二・一八五瓩

鏡は普通銅製であるのに、此の鏡が獨り銀製であるのは先づ注目に足るが、其れにも增して此の鏡の重要なるは、其の鏡背に所謂七寶の裝飾ある事である。鏡の輪廓は刳りある十二角形をなし、鏡背中央の圓鈕を花心にして六葉三重の裝飾瓣を放出せしめて、これに多彩の瑠璃を鈿す。瑠璃鈿の技術に就いては文獻の徵すべきものは無いが、遺物には外に奈良縣牽牛子塚出土の棺金具、新羅芬皇寺塔發見の針筒等あり、奈良朝時代に於ける此技の盛行を察する事が出來る。

漆皮八角鏡箱（縮寫約四分ノ三）

蓋　長徑二二・〇糎　短徑二〇・八糎　高四・〇糎　總高　四・二糎
身　長徑二一・三糎　短徑二〇・二糎　高三・八糎

瑠璃鈿背十二角鏡附屬の箱である。漆皮箱とは云ふものゝ、獸皮の代りに麻布を芯として漆を塗つたものらしく、漆地の下かすかに布目の窺はれるところもある。內に白絁の襯を作るも朽損甚しい。

第三十三圖　瑠璃鈿背十二角鏡　（原寸大　原色）

三重六瓣の花文の輪廓線に沿つて、細く截つた黃金板の堤を築き、其の堤の圍む各區に深綠・淡綠・黃色等の法瑯を流したもので、其の技法は今の七寶細工と全く同じと云つてよい。然し堤の金線の法瑯質上にまで突出してゐる點に於いて僅かに近時のものと異る。十二角の瓣と瓣との間には霰をうつた黃金板を張り、又側面小口にも幅〇・二糎の金板を遶らす。

第三十四圖　十二支八卦背圓鏡〔假五號〕（縮寫約三分ノ一）

徑　五九・四糎　緣厚　四・三糎　鈕高　五・一糎

重　五二・八瓩

御物中最大の鏡である。白銅製にして、鏡面中央は尙白銀色を呈するも、其他の部分は多く青褐色に銹びてゐる。鏡背中央には蟠居する獅子形の鈕を鑄出し、それをめぐつて四重の界圈を作り、其第一區には四神、二區には八卦、三區には十二支、第四區には葡萄唐草文を配す。圖文として珍らしいといふものでは無いが、鏡の大作遺品として記憶さるべきものである。

第三十五圖　十二支八卦背圓鏡部分

（原寸大）

前掲十二支八卦背圓鏡の一部を原寸大に示す。鈕を遶る朱雀玄武等の四神並十二支の文様は、半肉鑄出の上に更に鏨の線刻を補つてゐる。

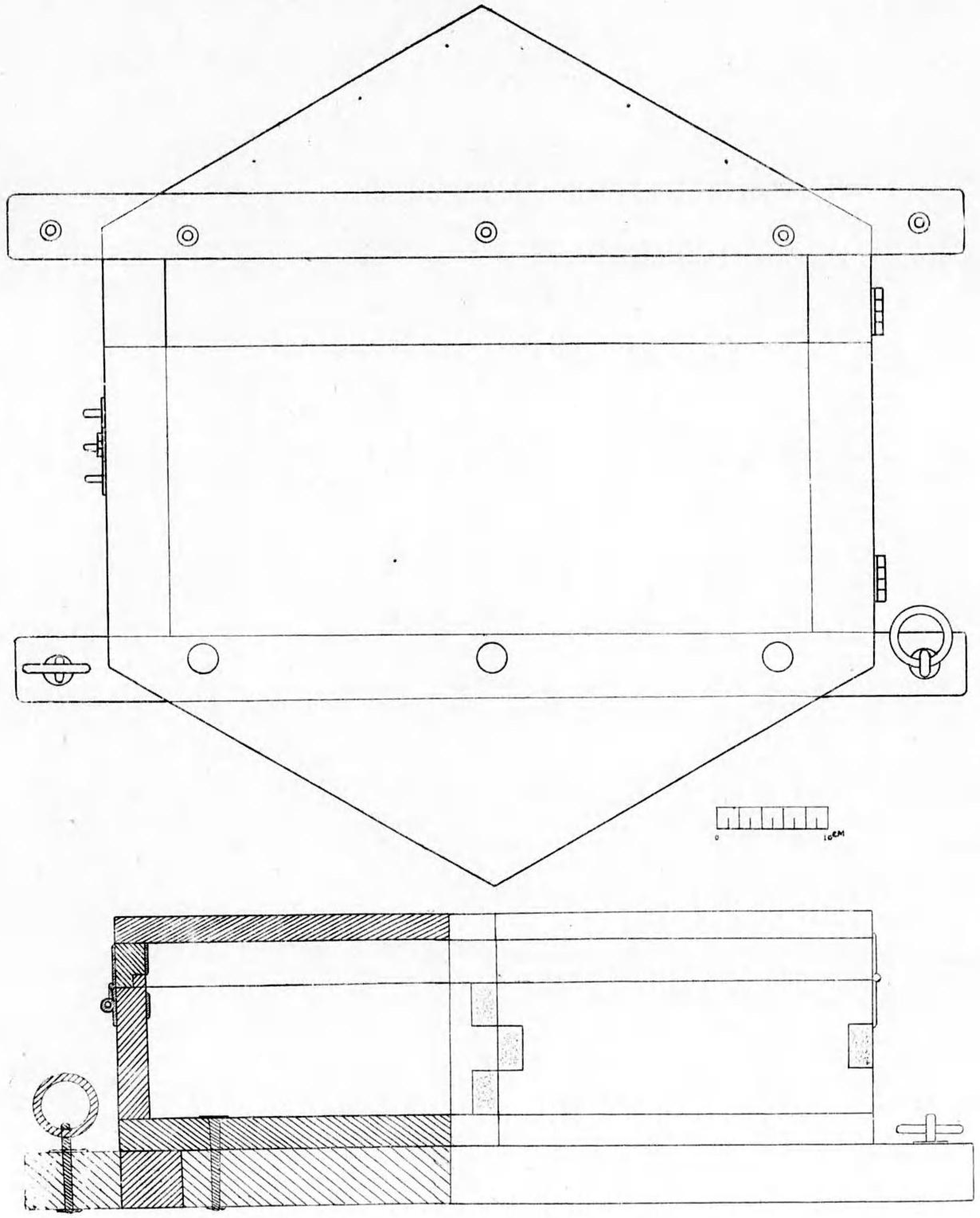
第三十六圖　赤漆八角鏡箱

（縮寫約四分ノ一）

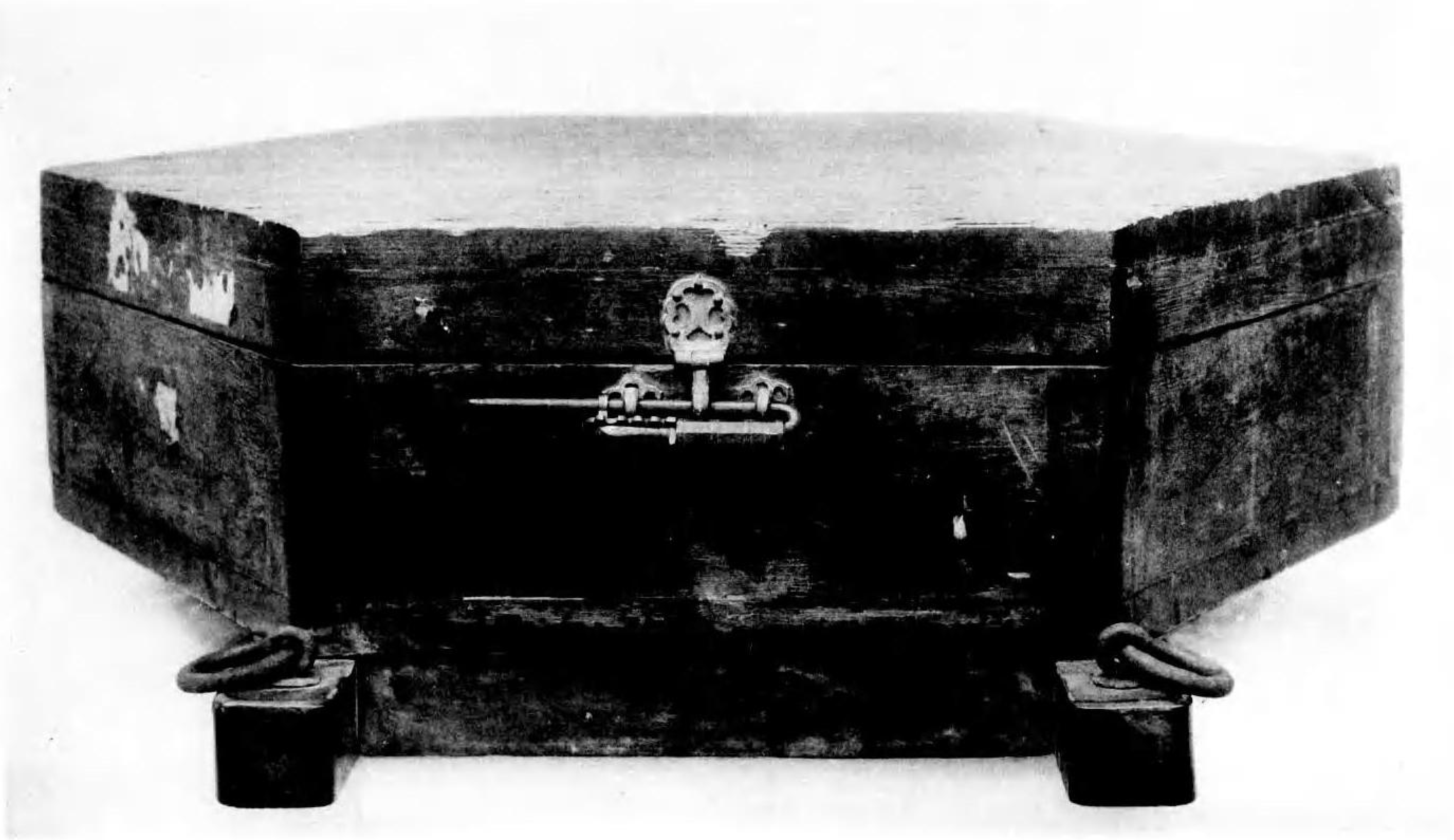
長徑　七九・五糎　短徑　六九・〇糎　高二一・〇糎

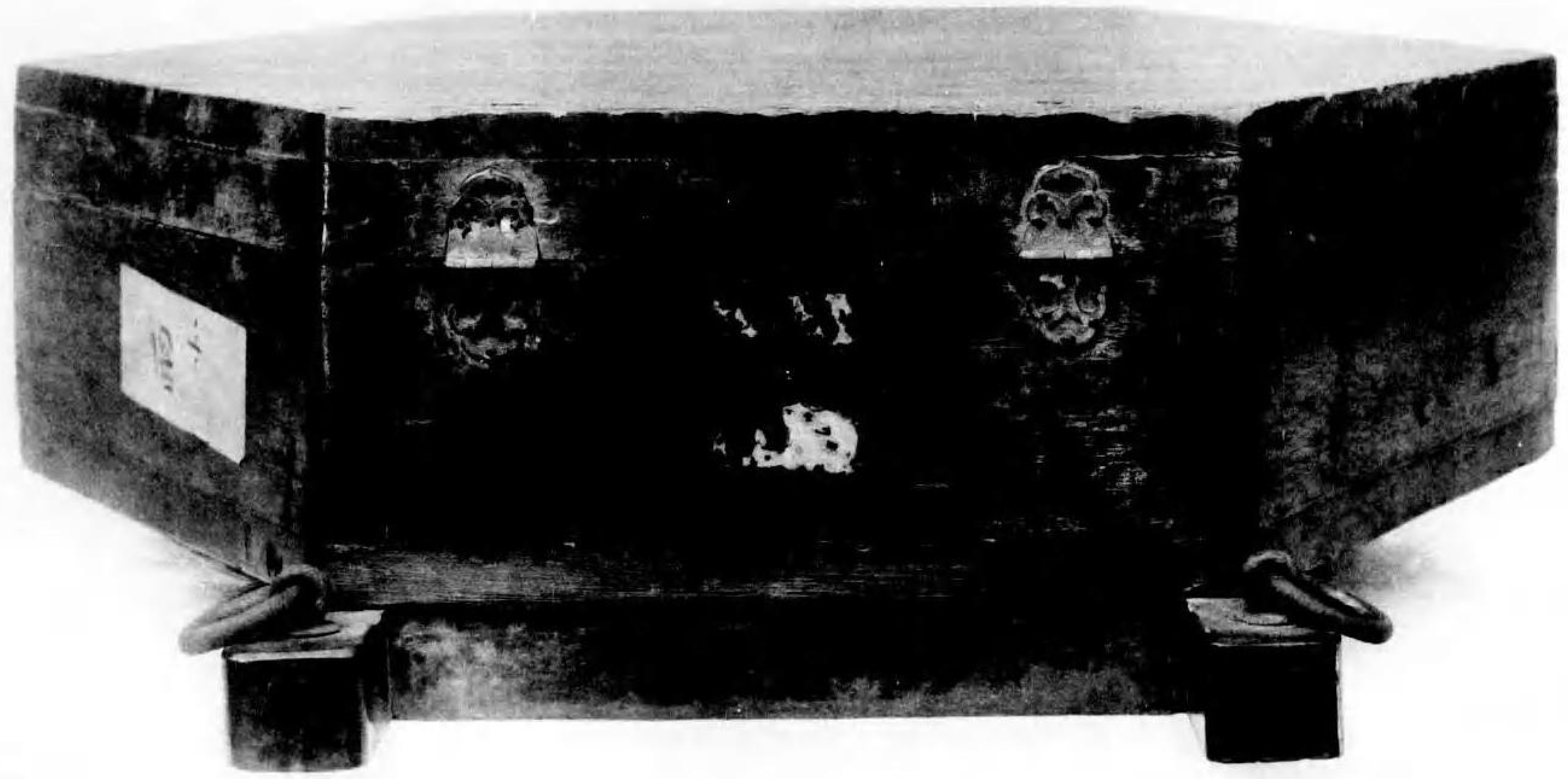
十二支八卦背圓鏡を入れる箱である。杉板を以つて作り、蓋は印籠にかさね、底に釣台を作りつけ、製作頑丈にて大鏡の容器にふさはしい。箱の內外は共に赤漆を塗り、外部稜面には特に墨漆の隈を取り、且つ其の一側に金銅の蝶番金具二個、其の對側に同壺金具を打ち鏁子を附す。

箱に造り附けの釣台もまた赤漆塗にして、小口には黑漆を塗り、前後各二個の鐵環をつけて、運搬の際の執繩に便してゐる。



赤漆八角鏡臺箱實測圖（二分ノ一大）





第三十七圖　鳥獸花背圓鏡〔假六號〕　（縮寫約十分ノ七）

徑　二九・七糎　緣厚　一・九糎　鈕高　一・七糎

重　六・六〇五瓩

白銅製の厚手の鏡で、鑄上りは餘りよくない。鏡背は界圈によつて二區に分たれ、內區は大瓩面をなし中央素鈕を遶つて麒麟と天馬双鳳とを廻旋的にあらはし、外區又瓩面に作つて花卉唐草と八羽の鳥とを圖し、且つ界圈の上には蝶と花卉文、周緣上には飛雲文をそれ〲散らす。

漆皮圓形鏡箱　（縮寫約二分ノ一）

蓋　徑　三三・五糎　高　四・五糎

身　徑　三二・五糎　高　六・八糎　總高　七・〇糎

上圖の鏡に附屬するもので、圓形被蓋に作り、內に葡萄唐草綠綾の襯を具す。

第三十八圖　海磯背圓鏡〔假七號〕

（縮寫約十分ノ七）

徑　三一・〇糎　緣高　〇・九糎　鈕高　一・五糎

重　四・八瓩

白銅製にして鏡面僅かに凸反す。鏡背には所謂海磯の文様をあらはし、中央の山岳に象つた鈕を遶つて水波を作り、其四方に四岳を配し、山中に双鹿水中に双禽を遊ばしめ、且つ五仙人悠遊自適の狀をうつす。五仙、或は舟に乘り或は魚に御し或は磯に倚るも、それが何れも左袵なるは注目すべく、又舟上の一人が環頭大刀を騎すも興味を引く。

黑漆金銀繪鏡箱

（縮寫約十分ノ六）

徑　三五・〇糎　高　六・五糎

木製圓形印籠蓋の箱で、上揭海磯鏡の容器である。其の蓋表と側面とには金銀泥にて花文を描くも剝落甚しい。

第三十九圖　海磯背圓鏡部分　（原寸大）

鈕頭には四岳を作り、又鈕座に磯を描き飛雲を配す。水波の表現が、前掲銀張山水花鳥背鏡の其れの古拙なると、法隆寺獻納御物海磯鏡の流動的なるとの中間にある事は注目に値する。尚山岳樹木の表現には、遠く朝鮮忠清南道扶餘郡窺岩里出土の塼文を思はせるものがある。

第四十圖　鳥獸葡萄背圓鏡〔假八號〕　（縮寫八分ノ七）

徑　二三・九糎　緣厚　一・六糎　鈕高　一・二糎

重　二・七五五瓩

厚手の白銅鏡で、內區には獅子鈕を遶つて葡萄唐草に戯れる八頭の獅子と六羽の鳥とを高肉にあらはし、外區には同じく葡萄唐草と六獸九鳥とを廻旋的に圖したもので、葡萄鏡としては先づ普通品である。外區の「重□斤一兩」の墨書貼紙は奈良朝當時のものと思はれる。

漆皮圓形鏡箱　（縮寫約九分ノ七）

徑　二八・七糎　高　四四・〇糎

黑漆無文の印籠蓋の箱で、內には緋綾表、黃綾裏の蒲團を敷く。

第四十一圖　鳥獸葡萄背圓鏡〔假九號〕（縮寫約十分ノ七）

徑　二九・七糎　緣厚　二・〇糎　鈕高　一・六糎

重　五〇五瓩

二重の圈圓によつて內外二區に分ち、內區には獅子鈕を遶つて葡萄唐草に四双の子持ち獅子を配し、外區には葡萄唐草と獅子・馬・孔雀・鳳凰・鴛鴦・鷄等を廻旋的にあらはし、又界圈上には鳥・蝶・蜂に葡萄、周緣上には飛雲を圖案す。就中內區の子持獅子の鑄出は最も精巧にして、親獅子子獅子互に相嚙み相戲れる狀は、凝視して飽く事を知らない。

第四十二圖　鳥獸葡萄背圓鏡〔假十號〕（縮寫約八分ノ七）

徑　二四・七糎　緣厚　二・〇糎　鈕高　一・八糎

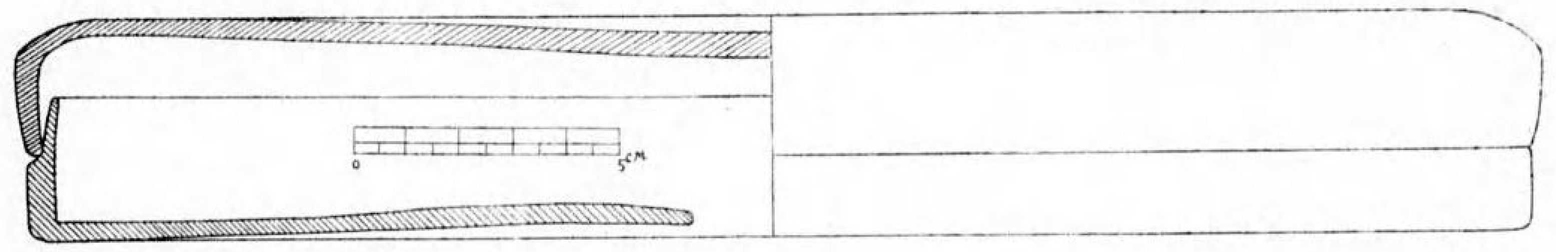
重　三・七五瓩

白銅製厚手の鏡で鑄上りは先づ上作と云ふべきであらうが、鏡背の圖文は葡萄鏡として寧ろ普通のものである。圈圍並に周緣の樣式は第四十圖の鏡に似るが、內區に於いて鳥を略し、外區の鳥獸の配列を整然たらしめてゐるのは前第四十一圖の鏡に近い。

漆皮圓形鏡箱（縮寫約二分ノ一）

徑　三三・七糎　高　三・八糎

上揭の鏡を入れる箱で、又印籠蓋に作り、內に緋綾の表黃綾の裏の圓蒲團を敷くこと、第四十圖鏡箱と同じである。



漆皮圓形鏡箱實測圖

第四十三圖　鳥獸葡萄背方鏡〔假十一號〕　（原寸大）

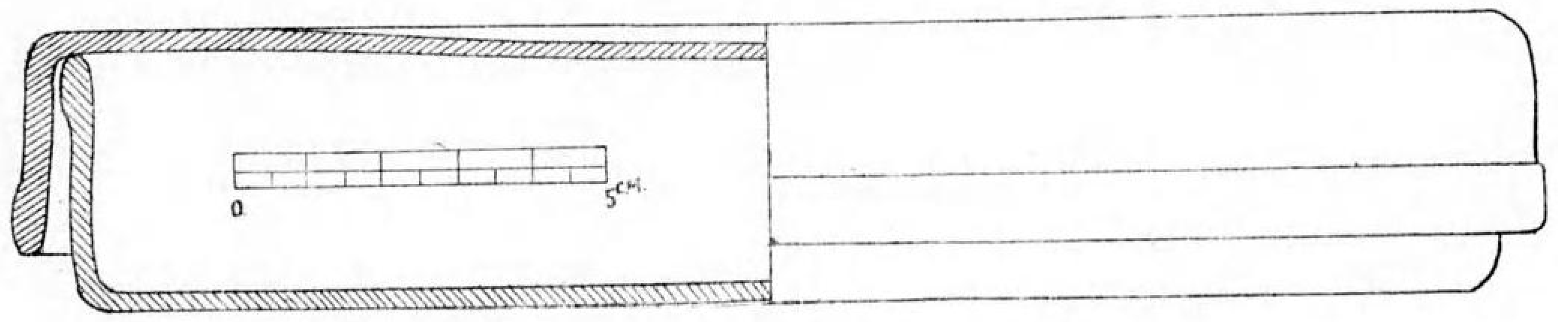
一邊長　一七・一糎　緣厚　一・六糎　鈕高　一・〇糎
重　一・九四五瓩

內區には獅子鈕を遶つて六獅子に葡萄唐草をあしらひ、外區には葡萄に蝶鳥を配す。鑄上りの鮮明鋭利なる此種の御物鏡中の白眉である。外區四隅に飛鳥を對角に配して全体の圖案を引締め乍ら、各邊の鳥蝶文の配在を任意變化させてゐるのは注目するに足る。又周緣には扁行の忍冬唐草を遶らす。

漆皮方形鏡箱　（縮寫約五分ノ四）

蓋　一邊長　二四・四糎　高　三・一糎
身　一邊長　一九・五糎　高　三・五糎　總高　四・二糎

上掲方鏡の附屬箱で、被蓋に作り、內に白絁の襯を入れる。



漆皮方形鏡箱實測圖

第四十四圖　鳥獸葡萄背圓鏡〔假十二號〕　（原寸大）

徑　一〇・二糎　緣厚　〇・七糎　鈕高　〇・八糎　重　二二〇瓦

內區には素鈕を遶つて四獸を、外區には忍冬葡萄唐草と四鳥とを各廻旋的にあらはす。鳥獸あり葡萄あれば一種の葡萄鏡と云ふべきであるが、鈕を獸形にせず、又內外區の緣に鋸齒文を作るは、稍變種に屬する。

連弧四乳背圓鏡〔假十三號〕　（原寸大）

徑　一六・九糎　緣厚　〇・五五糎　鈕高　〇・七糎　重　八〇〇瓦

中央四葉座鈕を遶つて方形の銘帶を劃し、四方四乳と穗文を配し、緣に內行の連孤を廻らす。銘は三字宛四方に分けて「長相思、毋二相忘一常貴レ官樂未レ央」と右旋りに鑄出してゐる。

第四十五圖　單圈漫背圓鏡　九面ノ内

（上縮寫八分ノ七　下縮寫七分ノ三）

上　〔假十四號〕　徑二三・三糎　縁厚一・三糎　鈕高一・二糎　重三・〇瓩

下右〔假十五號〕　徑二三・三糎　縁厚一・二糎　鈕高一・二糎　重二・〇七五瓩

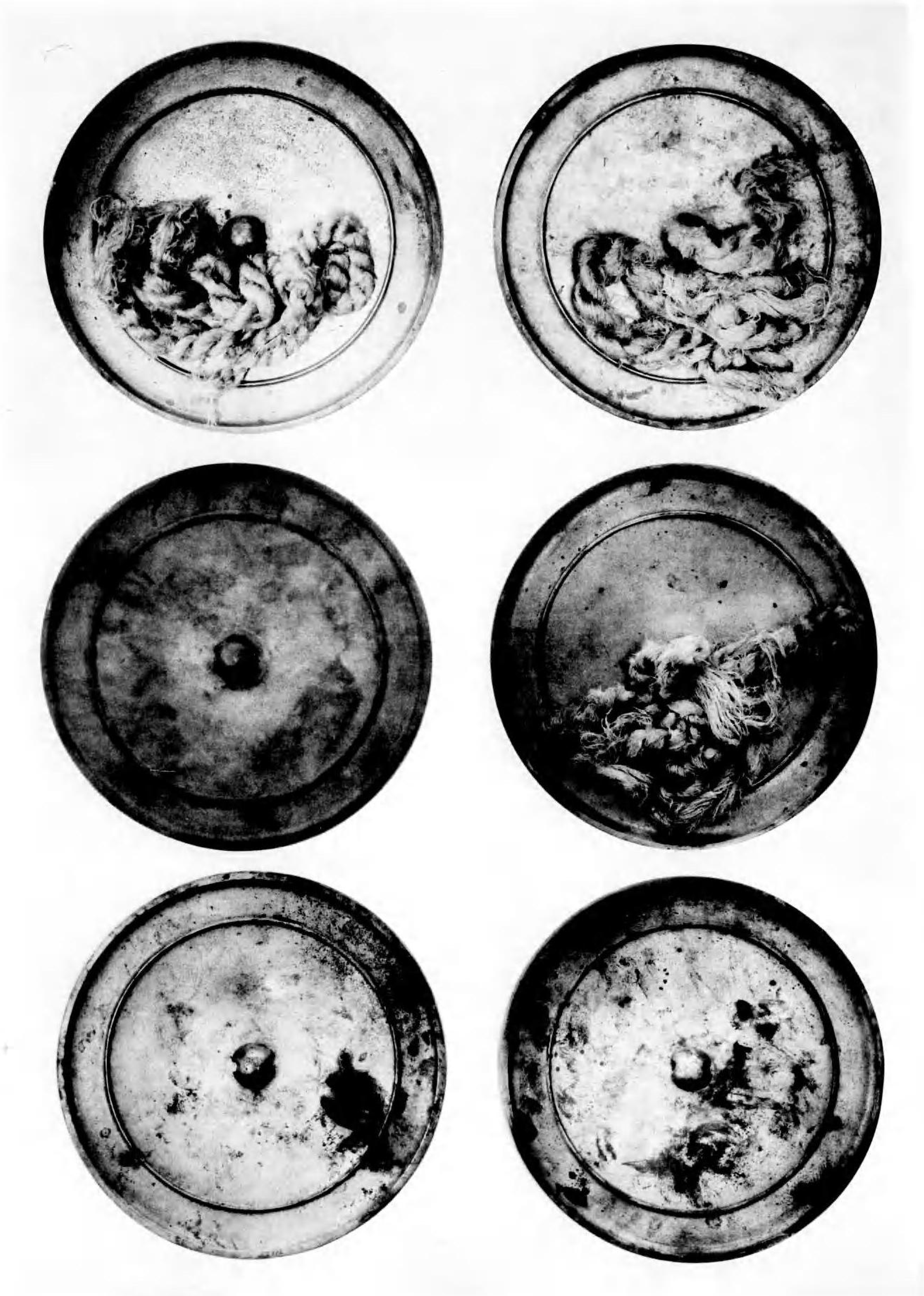
下左〔假十六號〕　徑二三・三糎　縁厚一・二糎　鈕高一・二糎　重二・四六五瓩

白銅製、素鈕單圈の素文鏡で、何れも縁に沿つて大匙面をとり、鏡面僅かに反る。三面共に同形、又同樣の白練糸の舊帶を着く。

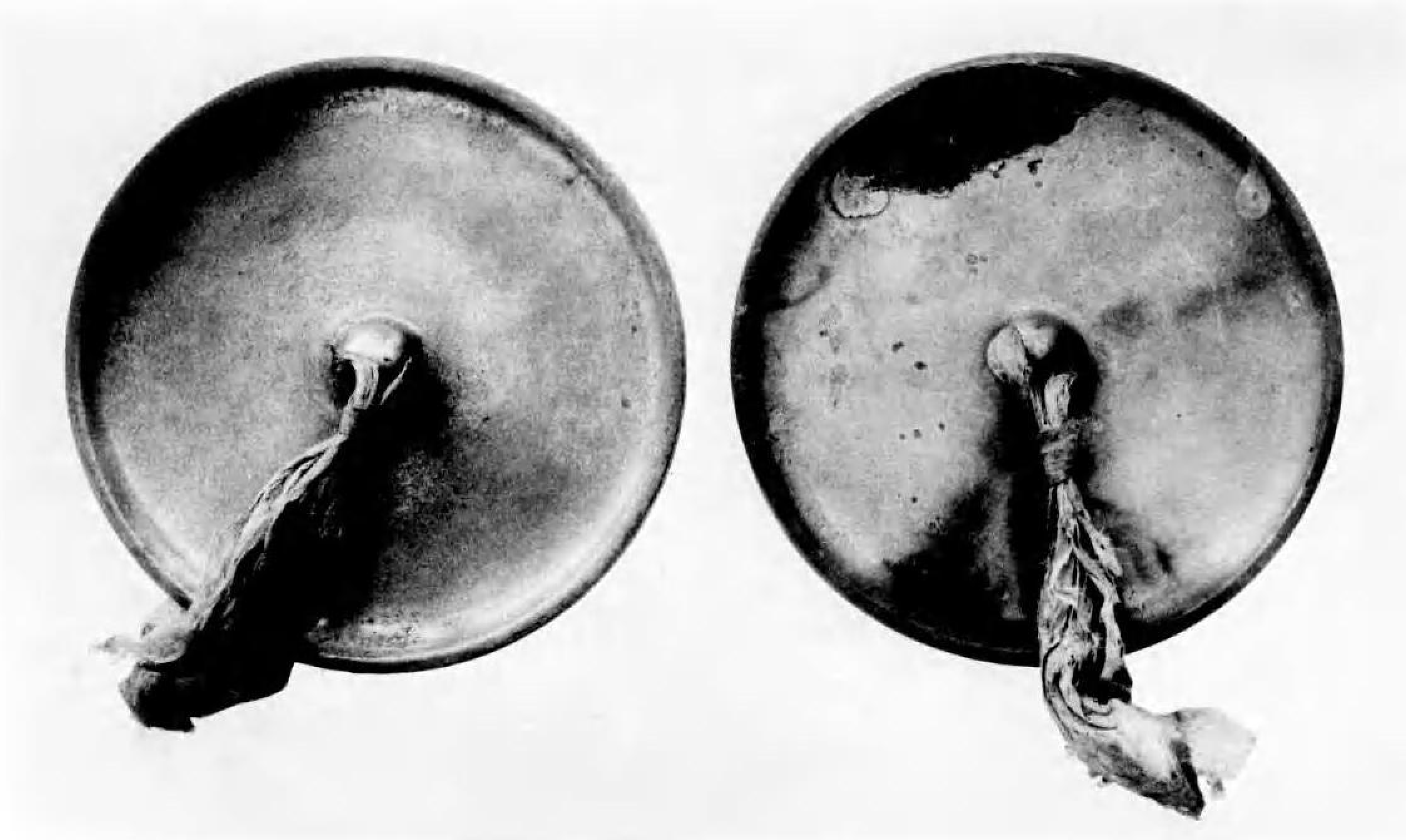
第四十六圖　單圈漫背圓鏡　九面ノ內　（縮寫約七分ノ三）

上右〔假十七號〕　徑三・二糎　緣厚一・二糎　鈕高一・一糎　重二・四三瓧
上左〔假十八號〕　徑三・二糎　緣厚一・三糎　鈕高一・一糎　重二・六一五瓧
中右〔假十九號〕　徑三・三糎　緣厚一・一糎　鈕高一・一糎　重二・〇三瓧
中左〔假二十號〕　徑三・三糎　緣厚一・三糎　鈕高一・三糎　重二・七三五瓧
下右〔假二十一號〕　徑三・二糎　緣厚一・三糎　鈕高一・三糎　重二・六三五瓧
下左〔假二十二號〕　徑三・二糎　緣厚一・二糎　鈕高一・一糎　重二・四七瓧

何れも白銅製にして共に前掲假十四號鏡と同質同形である。假十七・十八・十九號は舊帶を存するも他は之を失ふ。徑長・緣厚・鈕高の法量は何れも相似るが、重量の一定ならぬはどうした故であらう。



第四十七圖　漫背圓鏡　八面ノ内　（上原寸大　下縮寫五分ノ三）

上　〔假二十三號〕　徑一四・六糎　縁厚一・二糎　鈕高〇・九糎　重九三五瓦
下右　〔假二十四號〕　徑一四・六糎　縁厚一・〇糎　鈕高〇・九糎　重七八七瓦
下左　〔假二十五號〕　徑一四・六糎　縁厚一・二糎　鈕高〇・九糎　重九七五瓦

白銅製厚手素鈕の鏡で、鏡面には反り無く、鏡背は縁に沿つて大匙面に窪み、鈕には木綿の帶を結ぶ。帛糸の帶の朽損多きに對し、木綿の帶の完全に殘るは、絹織物の朽ちて麻布の完きに相應するものと云ふべきか。